

さらなる真相を求めて?!

～続「古代史の旅」～

(総集版)

堂本彰夫

2019年12月

※ この「さらなる真相を求めて～続・『古代史の旅』～Part 1」は、私・堂本が、長年の夢で、しかし悪戦苦闘しながら行っている「我が国古代史解明」の、言わば「第2段階」の最初の部分（1～9）です！まだまだ不分明なところ、辻褃の合わないところも多々ありますが、素人の無恥（浅はかさ？）ということで、ご寛恕いただければと思います！

なお、「第1段階」の「古代史の旅」（Part 1/Part 2）も、下記ホームページ上に掲載していますので、併せてご笑読？いただければ幸いです！

（平成 30 年 1 月）

※（「さらなる真相を求めて～続・『古代史の旅』～Part 2」）

（平成 30 年 5 月）

<連絡先>

ホームページURL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒gakuyou17@outlook.jp

目 次

- 1 大枠としてどんな骨格が描けるのか？そこにある「大前提」の確認?!まずは、そこに全力投球?!
- 2 大枠（大前提）を浮かび上がらせる（確信させる）、何人かの仮説（体系）
- 3 改めてまず、「倭国大乱」と2世紀前後の「倭国」の実像（実体）を把握しよう！
- 4 『魏志倭人伝』の記事から判明する?、「倭国大乱」前後（→女王国連合）の確定的な所在事項?!
- 5 考古学（遺跡・遺物等の発見）から判明する、「倭国大乱?」前後の列島の真相?!
- 6 前方後方墳勢力と前方後円墳勢力の出自と、その和合・離反の真相?!
- 7 吉備と出雲の関係?!「出雲の国譲り」は、まずは吉備勢力による「出雲進出」の物語か?!
- 8 「銅鐸」「巴形銅器」は、誰（どのような勢力）が使用し、その結末はどのようになったのか?!
- 9 「古墳」と、各勢力（氏族）の集散離合?!その出現状況から見えてくる、具体的な真相?!
- 10 「丹波・近江」の九州進出?と応神（百濟）勢力との出会い・和合?!そして、「近畿・大和」への進出?!
- 11 「出雲?丹波（丹後?）」の九州進出と宗像（氏）の関係?!そして、その先に見えてくるものは?!
- 12 とにかく、「応神」の特定化が急がれる?!ただし、「継体」は、ほぼ目星が付いている?!
- 13 百濟の「檀魯制」から見た、九州（筑紫）王朝と近畿（河内）王朝の関係熟考?!
- 14 全国に散らばる「賀茂（族）」の名?!一体、何故か?!そして、彼らは何者なのか?!
- 15 海人族（南方系倭人→安曇族）の全国ネットワーク?!まずは、そこから始まった?!
- 16 「行った（派遣した）」という「話」は、そこから来た（集まってきた）という「話」?!
- 17 「秦氏」と「応神」、そして「蘇我氏」との関係?!いよいよ、大本命?「秦氏」の怪に迫る?!
- 18 「大国主命」と「素戔嗚命」「事代主神」の関係、そして、改めて「出雲」とは?!

1 大枠として、どんな骨格が描けるのか？～そこにある「大前提」の確認?!

まずは、そこに全力投球?!～

ということで、私の「古代史の旅」は、まだまだ判然としない部分を多々残しながらも、「さらなる真相を求めて」、次なるステップを目指すこととなった。

これからの方法論（アプローチ）としては、記紀編纂の遂行者（黒幕?）であった藤原氏（まずは不平等!）の本源的な意図（目的）を中心としながら、記紀（とりわけ『日本書紀』）の構図（彼らが示そうとした真実の大枠→捏造や造作は多々行われているが、多分、その大きな骨格自体は、嘘はついていない?!）を読み取り、それと、これまでの、多くの人の有力な「研究成果」（そこには、「記紀」から、あるいはその他の文献・史料からの発見・有用な考察がある?!）を照らし合わせながら、より真実に近い? 論述を試みるという方法である。

つまり、「記紀」が示す真実の? 解説は、①記紀編纂者（藤原氏）の意図、②これまでの、信用（頼?）できる「研究成果」（そこに見え隠れする真実?）、その双方の照合から得られるということである。

ただし、そこには、改めて「大前提」が必要となる。史実の大まかな流れと言ってもよいが、それを整理・確認しておく必要があるということである。しかし、その「大前提」が間違っているものであれば、当然この方法論（アプローチ）は使えないものとなる?!

その時には、その時点で再スタートしなければならない! それ故に、厳しい覚悟が必要となる?! 改めて、その「大前提」とは、次のようなものである。

① 2世紀後半の「倭国大乱」（『魏志』記載分）は、北部九州沿岸部の、それまでの盟主国「奴国」（漢倭 or 倭奴国）勢力（中国江南地方からの渡来海人族→安曇族）と、有明海沿岸部の、新興? 「邪馬台国」勢力（海部・尾張・紀氏の祖?）との覇権争いであった?! 結果は、「邪馬台国」勢力の勝利と、「奴国」勢力の敗北・逃走である（→主勢力は出雲・瀬戸内海沿岸→近畿・大和へ）! 後者の余波が、瀬戸内海沿岸部における「高地性集落」の出現である?!

ちなみに、その瀬戸内海沿岸部での「高地性集落」の出現は、それ以前に、そこに入植・生活していた人々・種族がいたということである! 彼らもまた、以前に九州を経由して、当地に入植していた「倭人」であった?! なお、新興「邪馬台国」の主力は、有明海周りで入植してきた半島倭人（大伽耶?）であった?!

② 3世紀初頭、近畿・大和に、上記（九州）倭国（邪馬台国）に対抗するため（失った故国を回復するため?）、東進していた近江・尾張?・越・出雲、そして吉備勢力が、河内、近江（→伊勢遺跡）を経由して、大和（纏向）に集結した（鉄の争奪・分配が、一番の要素?!）。

その後、出雲の蹴落とす（仲間はずれ? →出雲の国譲り!）を敢行しながら、

近畿・大和勢力（「大和王権」）は、（九州）倭国（邪馬台国）を征服して（飲み込んで）いく！→神功皇后・仲哀・武内宿禰説話?!一方で、彼らは、東海・関東・東北にも、その版図を広げていく。しかし、（九州）倭国（邪馬台国）自体は筑後地方に残り（→大倭^{たい}国?）、「倭国」の本家筋として、8世紀初頭まで存続した?!

- ③ 4世紀初頭、百済王族宗家（扶余・高句麗系→沸流系余氏）の「滕^{とう}→高良大明神→武内宿禰?」（本当の応神のモデル?!）が「貴（木 or 基肆）国」（「邪馬台国」の一領域）へ渡来してきて、「大倭→倭^{たい}国?」を成した?!そこから、「倭の五王」（讃・珍・斉・興・武）が登場してくる?!

ただし、「斉」の時、血統が温祚系余氏（事実上の百済王家!）へと移り、当時の百済との関係が強まっていく!有名な「武」は、この時の最後の?王である?!なお、この時の「（出雲系を飲み込んだ?）応神→滕^{とう}→讃?勢力」と「大和王権」勢力の確執・関係が、記紀において一番誤魔化し（暈^ぼかし?）が多い?!→宇佐神宮・宗像大社等との関係、巨大古墳の建造（河内王朝?）等?!

- ④ 5世紀後半、百済王族（仇台系余→牟氏）軍君^{男第王}（第一「継体」?）が、（九州→筑紫）倭国の檐魯?（豊国倭国）の王となり、当時の本家筋（温祚系余氏）の磐井を、物部麤鹿（火）と共に滅ぼす（「磐井の乱」）。九州で麤鹿（火）が政権を構えたが、麤鹿（火）の死後、その倭国本宗家（物部氏）は二つに分かれた→麤鹿（火）系と尾輿系。ちなみに、尾輿系から蘇我氏（弟稻目）が分かれる（→上宮王家）。

一方、豊国の軍君^{男第王}（第一「継体」?）勢力は、近畿河内・近江・越に移動（息長氏→彦太尊?・第二「継体」?）!その後6世紀初頭、半島情勢の悪化に伴って、蘇我氏（→上宮王家）も近畿へ移動した（播磨→河内→飛鳥）→倭国勢力（の有力部分?）が、近畿・大和に集結したことになる?!ただし、九州倭国（本家）は残っていた（→600年アメタラシヒコ・日出処天子）!

- ⑤ その九州に残っていた本家筋は、663年の「白村江の戦い」で壊滅?!先に近畿へ移動していた、一応本家筋の中大兄皇子（天智）が、中臣鎌足（こちらにも百済系王族≒余豊璋?）に唆^そそのかされて、大和飛鳥に移動していた本宗家・蘇我氏（→上宮王家）を滅ぼし（645年「乙巳の変」）、近江に遷都し、「倭国王→日本国王」を名乗った!ここに、「九州倭国」から「近畿倭国→日本国」への、事実上の変位が成就する!

- ⑥ だが、672年の「壬申の乱」において、蘇我氏（→上宮王家）の血を引く天武（尾輿→蘇我氏→上宮王家=倭国王家）が政権を奪還する（再び倭国王権へ!）?!しかしまた、天武の死後、持統（天武の後・天智の子）・藤原（不比等）体制が、再度（巧妙に?）倭国王権から日本国（天智）王権を奪還する。

そして、701年の「大宝律令」によって、(倭国→日本国)王権の完全成就を宣言する！さらに、国史(「日本書紀」)の編纂を企図し、(天照大神=持統を祖とする)万系一世化を内外に示す！

ただし、この後も、天武系と天智系(→藤原氏)の相克は続いた！しかし、徐々に天智系(→藤原氏)が政権を固めていき(独占化)、桓武の時に、まさにそれが完遂する！

とまあ、以上のような史実の流れ？を構想しているのであるが(→大前提)、これからは、その一つひとつを精査・吟味し、まさに、次なるステップとしたいということである。

(2017. 9. 18)

2 大枠（大前提）を浮かび上がらせる（確信させる?）、何人かの仮説（体系）

次に、先号（1）での「真相解明の大枠（①～⑥）」を浮かび上がらせる（確信させる?）、何人かの仮説（体系）を、以下、紹介しておきたい。

ただし、それらは、あくまで私自身の、勝手な（個人的な?）理解・受け止め方であり（ある意味、まったくの恣意的感想?!）、いわゆる「学術的な手順・手続き」を踏んでいるものではない! そういう意味では、同じような仮説（体系）や見解を有している人は、他にも、多々おられるかもしれない?!

・関裕二『(数々の著作物)』（列挙不能!）

これは、余りにも冊数が多く、列挙不能! であるが、まさしく私の「旅」の誘発者? であり、理解の軸者でもある!

基本は、藤原政権（不平等）が、その前の政権担当者であった「蘇我氏（←上宮王家）」を卑劣な手段（弑逆しいぎゃく）で葬り去り、そのことも含め、自らの素性や来歴を隠し、天智亡き後、天武に一時は実権を握られたが、その皇后持統及びその妹元明（草壁皇子妃）に取り入り?、天照大神を皇祖神とする「万世一系」の皇統譜を創り上げ、藤原政権の盤石化、永続化を図った?!

そして、その悪事、嘘? がバレないように、『魏志倭人伝』（邪馬台国や卑弥呼・台与等）や『宋書』（倭の五王）等も視野に入れ、「神話」を創作し、重要事実を換骨奪胎させながら、その真相を闇に葬っているという指摘（仮説体系）である!

・兼川晋『百済の王統と日本の古代 <半島>と<列島>の相互越境史』（不知火書房、2009年）

これは、これまで度々紹介（援用）させてもらってもきたが、端的に言えば、（九州）倭国の存在と、その倭国が、少なくとも8世紀初頭までは、我が国を代表する主権国家（筑紫倭国と豊国倭国の櫛魯制国家?）であったことを、「倭国年号」の实在という脈絡の中で実証されているものである!

特に、そこにおいて特筆されることは、その倭国が、『宋書』等に示す「倭の五王」の国のことであり、しかも、その王族が、百済（扶余→高句麗と同族?!）からの渡来者であったこと（そこには、三系統の王統があった!）、そして、その後の倭国の皇統譜は、その百済（三系統の王統）との「越境的人事交流」? によって形成されてきたこと、等々を明らかにされている?! まさに、括目に値する指摘（研究成果）である?!

・林修（←石渡信一郎）『応神＝ヤマトタケルは朝鮮人だった 異説日本国家の起源』（河出書房新社、2009年）

これは、内容的には、彼が師事? する石渡信一郎氏の所説紹介? であるが、結果的には?、上記兼川氏の百済王族の渡來說と同じである! 「応神」と「継体」となった、二人の百済王子（「昆支」と「軍君」）に着目して、彼らの末裔

達が、その後の我が国を創出してきたということが指摘されている?!伽耶（加羅）と百済からの、新旧2回の渡来集団が、古代日本国を建設したという指摘（仮説）は傾聴に値するが、兼川氏のような倭国九州説は採っていない?!

ちなみに、そこにおける最大の違い?は、「応神」を「昆支」とするかどうかであるが、「軍君」を「継体」とすることは同じである。そこが、何とも悩ましく、恨めしい?!

・**菊池秀夫**『邪馬台国と狗奴国と鉄』（彩流社、2010年）

これは、今の熊本県中北部にあったと（推測?）される「狗奴国」に注目し、当地方の菊池（市）と狗古智卑狗（彦?）の関係、そして何より、『魏志倭人伝』において、「邪馬台国の南にある狗奴国」が、確かにそこ（熊本県中北部）にあったのなら、「狗奴国の北にある」のは邪馬台国となるという指摘（見事な、背理法的証明!）である!

しかも、そこでは、阿蘇地方の製鉄（褐鉄鉱）の状況、九州における幾つかの勢力集団の分布とその関係、そして、その中の阿蘇地方の勢力（一部?）と南部九州（日向）勢力の近畿・大和への合同移動?の証拠?が示されている?!注目に値する、研究成果である!

・**斎藤忠**『あざむかれた王朝交代日本建国の謎』/『消された日本建国の謎』（学研パブリッシング、2011年/2013年）等

彼の研究（主張?）の嚆矢?は、かなり難解で、強引?なところもあるが、「701年」の持っている意味、すなわち正式な「日本国建国」（一般には「大宝律令」で認識!）の意味を抉り出しているところにある?!

「ヤマヒト（出雲勢力?）」と「ウミヒト（高天原勢力?）」の相克という全体の視点も、いわゆる伽耶勢力や百済勢力といった、半島南部の動静も含めた、倭国の成立とその具体的展開という点で、実に興味深いものである。その後、彼の研究（主張）はどうなっているのか?!

・**藤井耕一郎**『タケミカヅチの正体』（河出書房新社、2017年）

これは、私が読んだ（納得した?）最新の本であるが、紀元前後の諸勢力の攻防と移動の関係を、「手焙形土器」（前方後方墳勢力の象徴?）の出土状況に着目し、「倭国大乱」が、その主勢力（和珥氏/意富・大・大生・太・多氏?）によるものであったことが示されている?!

特に、そこでは、吉備勢力の動向が、「手焙形土器」の有無によって、考古学的にも証明されるものであり、「神武東征」や「出雲の国譲り」等が、まったくの作り話ではなかった?ことが分かるものである?!

・**「鴨着く島」** (kamodoku.dee.cc)

これは、偶々HP上で見つけたものであるが、私が考えている「古代史の実像?!」に、大いに援用できるものである?!特に、南九州大隅地方からの「賀茂

（鴨）族」の近畿・大和への移動の話は、「神武東征」（これ自体は創作?!）と関わる重要な史実？なのではないか?!本当に、名もなき？凄い人（達）が、HP上にはいるものである?!脱帽！

・『『勘注系図』の研究』（kodai.sakura.ne.jp）

これも、HP上のものであるが、京都府宮津市の籠の神社の『勘注系図』（国宝指定：「海部氏」の系譜を伝えるもの）にある人物（名）が、『魏志倭人伝』に出てくる卑弥呼や耆与、そして、その彼女らが送り出した「魏使」の人物（名）と同じだということ?!

もう一つが、古代最大の豪族「物部氏」の事績・系譜を示す『先代旧事本紀』（「尾張氏系譜」<巻五>）に出てくる人物（名）と、『勘注系図』の対応から、「物部氏」や「尾張氏」、もちろん「海部氏」、そして「紀氏」も、同族または縁戚関係にあるということ?!

ならば、卑弥呼や耆与等が、そのことによって特定されてくる?!ある意味、大変な発見?!である！しかし、本当か?!

(2017. 9. 20)

3 改めてまず、「倭国大乱」と2世紀前後の「倭国」の実像（実体）を把握しよう！

さて、ここで改めて、最初に、先々号（1）の①に関わって、「倭国大乱」とは言うものの、それが、九州北部の、いわゆる『魏志倭人伝』（以下、『魏志』）に記載されている国々での争いなのか、それを含めた九州島全体を巻き込んだのものなのか、それとも、当時の西日本全体の倭国（人）諸国を巻き込んだのものなのか、その実像（実体）を把握しておく必要がある！

何故なら、やはり、これまでの「研究成果」からは、まだまだ一つの正答？は、得られていないのではないかと判断されるからである？！

ただし、周知のように、考古学的には、同じ時期と思われる「高地性集落の出現と消滅」（特に、瀬戸内海沿岸部）が確認されており、それが、人々（ある勢力）の移動や衝突といった、何らかの事件？を示すものであることは間違いない?!だが、それが、例の『魏志』に言う「倭国大乱」に関わるものかどうかは、今のところ断定はできない?!

ちなみに、これについての「記紀」の記載も、直接的にはない?!とは言え、その事件？を挟んだ、当時の倭国？の実情については、いわゆる「神話の世界」に昇華？されているとは思われる（伊弉諾と伊弉冉の関係と確執？あるいは天照大神と須佐之男命の関係と確執？等）?!

いずれにしても、「記紀」においては、ここの部分は、どこを、どのように歪曲・捏造すればよいかというような、細かい配慮は不要？であったはずであり（単純に知らなかったということもある？）、ましてや30余国が、どこに、どのように所在していたかを示す意図も生まれなかったであろう?!

ただ、その当時「邪馬台国」というものがあり、魏から「親魏倭王」なる称号をもらった「卑弥呼」や「台与」という女王がいたという事実は、たとえ自らの直接的な先祖でなくても（それだから、なおさら？）無視できず、神功皇后等を創出したとも考えられる?!

一方、こうした中で、当時の倭国（の版図）や、具体的な構成国の位置関係等は、まさに明確な部分と、多くの人がそうであろうと考えている部分と、まだまだ比定？論争？が続いている部分があり、何とも歯痒い思いである！

もちろん、これが、件の「邪馬台国所在地論争」と密接につながっているために、今なお、容易に收拾がつかないということでもあるが、例えば『魏志』に書かれている「旁国」（特に説明がない、直接の情報がなかった？国！）が、どこにあったのか、その部分を、改めて精査・解明していくことによって（例えば菊池秀夫氏が、敵対する「狗奴国」の所在地を、「邪馬台国」と「北接する」関係から導き出されたように?!）、言わば百花繚乱？の論争に、終止符を打つこともできるわけである?!

ということで、ここでは、『魏志』記載の諸国の割り出しに挑戦してみることにするが、まず、これについては、訪問国？（実際に、すべての国を訪ねたのかどうかは分からない？）への距離・日数・方角等が、一応書かれてはいるが、それらの正誤を細かく吟味する必要はない（→そういうことで甲論乙駁するのはもったいない？）？！

正しければ、それに越したことはないが、お互い（魏と倭国）が、何らかの事情（思惑？）で、嘘やごまかし、あるいは誇張していることもあり得る？！だから、本当のこと（細かいこと）が分からなくても、ある意味仕方がない？！

したがって、むしろそれよりも？大事な点は、そもそも「魏使」が、何故、倭国（女王国）を訪れたのかである！伝聞や現地情報を、ただ単に確かめるためではない？！ましてや、気儘な観光？旅行ではなかったはずである？！もちろん、その目的を突き止めることはできないが、ここでは、「魏使」が、直接倭国（女王国）を訪れているという事実を重要視すればよいのである（訪ねていること自体は、間違いない！）？！

しかるに、いずれにしても、友好国（冊封国？）の地勢・国情を、具に調査するためではあったろう？！それは、もっと露骨に言えば、当時の「魏」のライバルであった「呉」を牽制（挟み撃ち？）するための、「情報収集」であったということである？！もし、そうであれば、そこで「魏使」は、現実的に、どこを、どのように見て回る（聞く）必要があったのかということになる？！

もちろん、朝鮮半島（帯方郡・現在のソウル付近？）から行くわけであるので（兵力の派遣？）、どこを経由して、どこに上陸？すればよいのか、そして、どのように邪馬台国（女王国）まで行けばよいのかを、その直接経由する国々を見聞して、必要な情報を記載したということになる？！

けれども、『魏志』の著者陳寿は、ただそれ（『魏志』）を書くためにだけ、その「魏使」の報告文？を利用したであろうし、直接の軍事情報を載せたわけではなかった？！だが、その「魏使」の情報は、邪馬台国（女王国）に至るまでに、どこの国を経由していけばよいのかを書いてはいるので、それに基づいて、それぞれの国を紹介した？！

しかし、「魏使」は、軍事情報を（も？）意図していた？ので、倭国領域の一番外側までを知ろうとした？！つまり、倭国の国境付近を尋ね歩いたということでもある？！

となれば、邪馬台国の南にあり、そこと敵対していた「狗奴国」の傍を通ることはなかったし、また、女王国連合の外の国を調べたり、その直前を（例え海上であったとしても！）通ったりすることもなかった？！端的に、危険であったからである？！

このようにみてくると、狗邪韓国から対馬→壱岐→末盧→伊都→奴→不彌→

投馬→邪馬台国は、基本的には倭国の国境を形成する、しかも重要な国々であった?!

ちなみに、その他の「旁国」とは、それ以外の内?に所在する、しかも直接には訪ねなくても済む（距離的には近い?）国々であり、伝聞やエピソード等で書いた?!

また、名前自体がない（分からない?）国々は、これも伝聞・エピソード等で、国名を考案したことも考えられる（この場合、国名の「音価」から比定地を同定することは、あまり意味はない!）?!

(2017. 9. 21)

4 『魏志』の記事から判明する?、「倭国大乱」前後(→女王国連合)の確定的な所在情報?!

改めて、ここでは、いわゆる『魏志』の記載事項から判明する、「倭国大乱」前後、その後の邪馬台国(→女王国連合)の所在に関わる、かなり?確定的な事項(史実?)を、順不同ではあるが、列挙しておきたい!

もちろん、それらは、「かなり?確定的な」としてしか言えないが(直接、証明することは出来ない!)、いずれにしても、ここから、「ここは、絶対にないよね!」ということが逆に言えれば(しかも、一つでもそうであれば!)、ある比定地(直接的には近畿大和!)は、残念ながら?、その所在地論争から降りてもらわなければならない!

繰り返しになるが、それに費やす?、多くの人、折角の労苦が無駄になるということである(→一人ひとりのエネルギーや作業を、新たな真相解明に向かって結集させることができる?!)!

ただし、以下の事項は(も?)、上に述べた「『ここは、絶対にないよね!』」ということが逆に言えれば(しかも、一つでもそうであれば!)ということには、必ずしもならないかもしれない(残念ながら、ほとんど類推の域を超えていない?!)!

とは言え、そこに向かっていくための視点や要素にはなり得る?!そんなことを思って(期待して)の所作であることを、予めご了解頂きたい!その意味では、単なる「一里塚」なのではある?!

- ・邪馬台国は、『魏志』を文字通り読めば、はるか南方海上に出てしまうという指摘もあるが、実際には、その南には「狗奴国」もあるのであり(間違いない!)、距離や方向の読み込みには限界(無理)がある?!

両国?が、実際に存在していたのは間違いないのであるから、そのことを前提にして、各種の情報(記事)を整合する必要がある!

→記事の、特定の部分だけ(単独)で、判断してはいけない!とにかく、実在が優先する!

- ・「不彌国」の東で、海を渡れば、また別の倭人の国があるということなので、少なくともその当時は、「倭国」(の版図)自体は、九州(筑紫)島を出ることはない?!

→邪馬台国(女王国)は、少なくとも近畿にはない?!

- ・「投馬国」や「邪馬台国」へ行くのに(その時通った道筋に!)「水行」があるが、これは河川航行(またはそれも含む?!)であり、その場合、かなりの手間暇(日数)がかかることは明らかである?!

当然、当時も、既に河川航行(海から河川、河川から河川、河川から海へと)は頻繁に行われていたし、様々な経路(水路)によって、人々は往来してい

た?!陸路よりは、場合によっては早く、しかも物を運ぶ際には、とても便利であった?!

→ここでは、「筑後川」あるいはその支流の「宝満川」、さらには「御笠川」水系が、その候補地?!

- ・海はもちろんであるが、山地や大きな河川が、当時の国々を分けていた(→国境?)ことは、ある意味当然である!外から来た人々(倭人入植者?)は、まずは船で河川に入り、稲作等も含めて、その河川の傍(流域)に居住地を定めた?!

その結果、それぞれの河川に挟まれている、それぞれの土地が、一つひとつの国(クニ)となった?!だから、その境界を巡る争いが、その河川を挟んで繰り返された?!

例えば、「邪馬台国」と「狗奴国」は、もとより不仲であったと書いてあるが、その国境と考えられる「筑肥山地」あるいは、その南側の「菊池川」(ないしは「緑川」も?)の周辺には、その(「邪馬台国」と「狗奴国」の)国境線?が、時代ごとに変わっている(上下している?)と言われている?!

→当時の倭国の(版図の)一番南側が「邪馬台国」であった?!

- ・伊都国に「一大率」が置かれていると書かれているが、通常は、そこが、半島と倭国を結ぶ重要な港(正式な出入国港?)であったことを示すものである?!

そして、その港を管理・監督する「一大率」に、盟主国「邪馬台国(女王国)」の重要人物(兵力)が派遣されていたか、ないしは伊都国内の、それこそ信頼できる人物(兵力)が任命されていたものと考えられる?!

また、対馬、壱岐等の「夷守ひなもり」の役職も、邪馬台国(女王国)」の人物あるいは、そこに信任のある現地人物(勢力)に委ねられていたと考えられる?!

→同じ名前の役職?があるところ(国)は、同族または盟友国である?!

- ・当時の国々(倭国)における「まとまりと統率力の浸透」は、それらの国々が同族、あるいは何らかのつながりがあったことはもちろんであるが、その所在も、かなり近接していたことが、容易に?推察される?!

そうでなければ、とりわけ「統率力の浸透」は、当時(弥生期後半)にあっては、ほとんど?考えられない(物理的に無理?!)

→邪馬台国(女王国)は、近畿大和にあらうはずがない?!

- ・夏、冬を問わず(生)野菜が食べられるところとあるが、「跣はだし」はともかく、そこは、一年を通して温暖な土地柄であった?!

→(ここでも、)邪馬台国(女王国)は、近畿大和にあらうはずがない?!

(2017. 9. 27)

5 考古学（遺跡・遺物等の発見）から判明する、「倭国大乱？」前後の列島の真相?!

(1) 「倭国大乱」は、吉備からの「前方後方墳勢力」が引き起こした、列島全体の「大乱」の一部であった?!

次に、最近読んだ、藤井耕一郎氏の『タケミカツチの正体』（河出書房新社、2017年）から、ここでまとまって採り上げている「倭国大乱」前後（弥生中期～後期）の具体的な状況、つまり、幾つかの勢力（部族）の移動・和合・衝突・覇権交代等?の真相が、かなり見えてくるのではないか?!

ただし、『魏志』等が示す、倭国あるいは卑弥呼・台与等の動き（「倭国大乱」→邪馬台国の興隆?）は、その藤井氏が示す「倭国大乱?」の、九州での局面を記しているものであり（その意味では、「倭国大乱?」の一部?!）、彼が示す、吉備・出雲、そして近江・東海・大和等の、まさに本州中央部（→葦原中つ国?）での「倭国大乱?」の中心部分ではないが、大いに関係していたものではないか?!

これが、私の、今回の主張（類推?）の根幹である!すなわち、『魏志』が記す「倭国大乱」とは、九州にある、魏の冊封国?の「倭国」（→「親魏倭王」国）での動乱ではあるが、藤井氏が示す「倭国大乱?」（の一部）を、（九州）倭国（卑弥呼・台与）の局面として、示しているものではないかということである?!

とにかく、この二つの事件?（大乱）は、恐らく同時期のもの（→一連の事件?）であり、私の想定が正しいかどうかはともかく、それらによって、『魏志』が示す「倭国大乱」の全体像、すなわち、それが、「どこで、何故、起きたのか」、「どういう勢力が、どのように、それに関わっていたのか」等が分かるとともに、それに連動?している（九州）倭国での大乱?が、「いつ、誰（どこ）によって、どのように惹き起こされたのか」も分かるということになるということである?!これは、まさに大発見となる?!

例えば、「『邪馬台国』とは何（どこの勢力）だったのか?」、「何故、その卑弥呼あるいは台与が共立されたのか?」等が、分かるかもしれない?!さらにはまた、それ以前の（九州）倭国の盟主であった「奴国」（の勢力）が、「その後、どこに行ったのか?」ということも、分かるかもしれないということである?!

もちろん、こうしたことは、私の、ある意味勝手な推測（暴走?）であるかもしれないが、吉備から出発した「前方後方墳」の勢力が、「一度近畿・近江に移ってから来たのか?」、あるいは「吉備から直接来たのか?」（指摘によれば、前者だが?!）、とにかく、その勢力（の一派?）が、九州吉野ヶ里（の勢力）を滅ぼし、そこに「前方後方墳」を造ったということは、ほぼ間違いなさそう

なのである?!

しかるに、このことについては、私は、以前から海部氏・尾張氏（→物部氏は、彼らと同族ではあるが、少し?扱いが違う?!）等の、今回改めて分かった、「前方後方墳勢力」の九州進出（彼らが出戻り?なのか、新しい進出なのかは分からないが!）があったのではないかと考えていたので、そのことと、今回の藤井氏の大変な研究成果が、うまく繋がるようにも思えるのである?!

いずれにしても、（九州）倭国（王権）にしろ、近畿大和（王権）にしろ、お互いの血縁・地縁的なものはあったが、8世紀初頭までは、別々の地において、それぞれの国?として併存・発展?してきたことは、以前から述べてきた通りであり、邪馬台国（卑弥呼・台与）がどちらにあったにせよ（もちろん、私は九州説ではあるが!）、少なくとも2世紀前後以降から?、九州と、（吉備・出雲・近江・丹波・越・東海を巻き込んだ）近畿大和に、二つの国（勢力）が同時に存在してきたことは間違いないということである?!

ここで改めて、その藤井氏の本の概要を、以下に示すこととする。多少の誤解やズレがあるかもしれないが、そこは、予め?ご寛恕いただきたい。

（2）「前方後円墳」に先立つ「前方後方墳」勢力の覇権?と、その象徴であった「手焙形てあぶりがた土器」?!

まず、記紀神話の中で、「タケミカヅチ」という名の人物（神）が登場するが、『古事記』では、①天尾羽張あめのおはばりの子の建御雷、そして、②大物主の曾孫の建甕槌とされ、『日本書紀』では、②が切り捨てられ、①の建御雷が、武甕雷あるいは武甕槌に変更されている?!

藤井氏によれば、このように、「タケミカヅチ」には隠された実像?があり、特に、日本書紀の「タケミカヅチ」は、その隠された実像?から導き出（考案?）された、ある種の虚像?ではないのかというのである?!

どういうことかと言うと、「ミカヅチ」の本来の意味は、「甕みか・かめ」という容器（→火?）の神、つまり「ミカの神」であり、その容器（「甕みか」）とは、ある時期の「手焙形てあぶりがた土器」（火の祭祀用?!）のことである!

そして、本来は雷=イカヅチ（雷神）と甕槌=ミカヅチ（甕みか・瓶かめ=容器（→火?）の神）は違う神なのであるが、何故か、日本書紀においては、②の大物主の曾孫の建甕槌の正体が隠されており、それが、武甕雷や武甕槌（←建御雷）にすり替えら（一体化さ?）れているというのである?!改めて、それは、どういうことなのか?!

これが、言わば、この本の出発点であるが、そこには、まさに古代勢力（部族）の、列島における移動・和合・衝突・覇権交代等の真相?が隠されているということ?!そして、その証拠（鍵）を握っているのが、他ならぬ「手焙形土器」（の出現状況）だということである!

ちなみに、一般には、「タケミカヅチ」は、例の「出雲の国譲り」に際して、武勇を立てた神（←刀剣の擬人化）として知られ、茨城県の「鹿島神宮」の祭神であり、後に、藤原氏の氏神社である「春日大社」の主祭神としても祀られている神である（中臣氏→藤原氏に乗っ取られた？）！

なお、その「出雲の国譲り」に際しては、「フツヌシ」もまた、武芸の神（←刀剣の擬人化）とされ、同じ北関東の「香取神宮」の主祭神とされているが、その神は、近畿大和の「石上神宮」（物部氏主宰?!）に祀られている神でもある！「タケミカヅチ」は尾張系（→中臣氏→藤原氏が継承した?!）、「フツヌシ」は物部系と見なされるが、事は、そんなに単純ではなさそうである?!

大枠として、『古事記』と『日本書紀』は同一の史実?を語っていると見なされているが、特に「神話」の部分では、このように、かなりの違い（用字や人物の入れ替え・省略?あるいは記載時期等!）があるのである（例えば、「命」と「尊」の使用!あるいは「ツヌガアラシト」の来訪時期等）！

その意味では、ここでの記載の違いから（も?）、「大物主」を登場させたい勢力（人物）（→古事記）と、その「大物主」を登場させたくない勢力（人物）（→日本書紀）が、記紀編纂時には同居?していたことになる?!ただ、彼らは、大筋においては、同じ歴史認識?を共有する勢力（人物）、すなわち同族?であったとも言えよう?!

端的には、それが、太（和珥氏→意富・大生・太・多）氏と藤原氏（←中臣氏?）であったということである?!

（3）「前方後方墳」は、どのように広がっていったのか?!また、それと「前方後円墳」（勢力）との関係は?!

さて、そのことは、後々判明していくことになる?のであろうが、実は、そのことよりも、ここでは、そこに至る経緯（史実?）の究明が面白い（説得力がある!）のである！

すなわち、例の2世紀末?の「倭国大乱」の前（弥生時代中期以前?）、いわゆる「環濠集落」を作った勢力が、まずは列島各地に広がっていく。多分彼らは、揚子江下流域から移り住んできた、いわゆる呉（越も?）の集団であり、基本的には海人族（→安曇氏?）であったろう（だから、全国各地に入植できたのでもある?!）。

その代表的なものが、もちろん「奴国」（←漢委奴国王）であるが、「環濠集落」としては、例えば佐賀県吉野ヶ里遺跡／奈良県唐古・鍵遺跡／愛知県朝日遺跡→神奈川県綾瀬市神崎遺跡が有名である！そこでは、巴形銅器、銅鐸等の、いわゆる青銅（祭）器が作られていたが、その後（弥生終末期）、それらは忽然と姿を消し、当地には、直後に「前方後方墳」が造られ、同時に「手焙形土器」が出現するというのである?!

しかも、このように、その「手焙形土器」の勢力は、まさに「前方後方墳」の勢力（→和珥勢力→スサノオ勢力？）なのであるが、その初期の手焙形土器が多いのは、これまでは大阪府、滋賀県であったが、それは、実際には（ここでは詳細は紹介できないが）、大阪湾（河内）から近江の方へ移動した吉備勢力（部族）のものであったということである?!

ただし、その「手焙形土器」の出現期はたったの 80 年間であり（だから貴重な「歴史証人」となるのであるが!）、その勢力も、次の古墳時代の初頭には消滅する! その勢力を消滅（衰微）させたのが、その古墳時代を到来させた勢力であり、その勢力もまた、実は、同じ吉備の前方後円墳勢力（→鴨・賀茂族? →物部氏・高天原勢力?）だったとされるのである?!

しかしながら、私にしてみれば、これだけであれば、さほど驚くことではない（吉備勢力が近畿・大和に集結したこと自体は、これまで分かっていた?!）! それも含めて、今回、倭国大乱前後における（時期が重なる!）、列島各地の勢力（部族）の移動・和合・衝突、そして、その後の覇権争いの軌跡が判明するかもしれないということが、驚きなのである?!

例えば、その抗争の本拠地（の一つ）が、実は、例の関裕二氏が指摘していた、滋賀県の伊勢遺跡であったというようなことが、俄然意味を帯びてくるのでもある! しかも、その勢力の中から、実は、前方後円墳の勢力（物部氏?）が現われ、そちらが、前方後方墳勢力とも和合しながらも、いわゆる大和での政権を樹立した（→纏向遺跡）ということなのでもある?!

さらに、これについては後でまた、その詳しい紹介もすることになるかとは思いますが、私からすれば、その「前方後方墳勢力」（和珥勢力→スサノオ勢力?）にしる、「前方後円墳勢力」（物部氏?）にしる、もともとは吉備にはいなかったと考えており、彼らが、いつ頃、どこから、吉備に移動・進出して来ていたのかということが、別の意味で興味をそそられるということである!

おそらく、それは北部九州（遠賀川流域?）から、そしてその前は、いわゆる朝鮮半島南部の伽耶地方からではないのかと、考えてもいるのである?!

ということで、もうお分かりだとは思いますが、これについては、いわゆる記紀の「神武東征」、とりわけ、彼（ら）の「吉備」への入港・滞在? が、脳裏に浮かんでくる! 多分（絶対!?）、この「前方後方墳勢力」（和珥勢力→スサノオ勢力?）や「前方後円墳勢力」（物部氏?）の移動の事実? が、件の「神武東征」の話に投影されているのではないかとということである?!

さらには、ここでは、かなりの飛躍? になるのかもしれないが、「神武（勢力）」の、吉備での滞在期間の違い（古事記→8年・全体で16年、日本書紀→3年・全体で3年半）は、この前方後方墳勢力と前方後円墳勢力の出自（吉備への進出・滞在時期）の違いを表しているのではないか?! そのようにも考えられる

のである?!

折角ではあるので、ここでは最後に、最初に示した「手焙形土器」の出現期について示しておきたい(藤井氏の本にある高橋一夫氏の提示による!)。それは、およそ80年間続いたとされ、以下のような、20年間隔での時期区分ができるということである?!

1 期 (出現期) : 紀元 170 年頃 (170~190 年)

岡山県 (西賀茂遺跡) が発祥?! 大阪府 (河内) 中心、兵庫県 (播磨)・京都府 (山背)

2 期 (盛行期) : ~ 2 世紀後葉 (190~210 年) 河内周辺から全国へ?!

唐古・鍵遺跡付近・愛知県朝日遺跡

3 (a + b) 期 (拡散期) : ~ 3 世紀前葉 (210~230 年) 庄内式土器

愛知県朝日遺跡・佐賀県吉野ヶ里遺跡

4 期 (消滅期) : ~ 3 世紀半ば (230~250 年) 古墳時代の始まり! 布留式土器

(2017. 9. 30)

6 前方後方墳勢力と前方後円墳勢力の出自と、その和合・離反の真相?!

(1) 宗教(意趣)上の違い(だけ?)だったのであろうか?!前方後方墳勢力と前方後円墳勢力の関係?!

前号(5)で紹介したように、初期大和王権(→纏向祭政都市)は、「吉備」に生まれ、「吉備」から進出していった「前方後方墳(手焙形土器→火の神信仰?)勢力」と「前方後円墳勢力(日神・太陽信仰)」の和合と離反によって樹立されたことは、ほぼ間違いない?!

では、その背景には何があったのか?!もちろん、先の藤井氏によれば、「手焙形土器」の有無に見られるように、ある種の宗教上の違い(いわゆる「まつりごと」における意趣?の違い!)ということにはなるが、果たしてそれ(だけ?)だったのか?!

ちなみに、これについては、どの本だったかは特定できないが、例の関裕二氏の指摘、すなわち近畿・大和と九州(北部)との「鉄の流通・分配?」を巡る各勢力(部族)の利害・思惑と、そこにおける、いわゆる「合従連衡?」のなせる業があったということが、改めて思い出される?!

そして、その一環としての、「前方後方墳勢力」の(一派の?)尾張氏?(←葛城氏?)の、他ならぬ「鉄」の入手と確保に関わる利害と立場の変更(丹波・近江の「前方後方墳勢力」への裏切り?)?!というようなことも、併せて思い出される?!

ただし、今のところ、その具体的な解明(そして、「記紀」への反映模様?)はひとまず置いておくこととして、ここでは、同じように、先の藤井氏の指摘から、両勢力(部族)の、吉備での所在状況(出雲への進出?も含めて?!)と、その後の近畿・大和への進出経路を整理しておきたい!

まず、前方後方墳勢力と前方後円墳勢力が、共に吉備から移動・進出してきたということであるが、彼らは、吉備のどのあたりに、いつごろ進出していたのか?!時期についてはよく分からないが、とにかく、そこは、「吉備の穴海(→吉備津)」と呼ばれた児島湾周辺(今では陸続き)と、そこを流れる「足守川」の流域(「王墓の丘」と呼ばれる!)であった!

そして、そこには、まさしく大和纏向の祭政都市に影響を与えていると言われる「楯築遺跡(前方後円墳の原型?)」(この文化が纏向に導入?!→特殊器台等)がある!さらにまた、その近辺には、最古級の「手焙形土器」が出た「西賀茂遺跡」、あるいは「足守川賀茂遺跡」があるわけである!余談?ではあるが、その「賀茂」という名前(地名)は、私にとっては、別な意味で非常に興味が出るものである?!

いずれにしても、その辺りが、彼らの根拠地(出立地)であったということであるが、その後、当地から「前方後方墳(手焙形土器)勢力」=「ワニ系」

の勢力（火神信仰→龍王信仰→呉と関係？→後漢系？）が、播磨を經由して、大阪河内に進出し、淀川を遡り、近江經由（琵琶湖を含む淀川水系）で、尾張地方（朝日遺跡）にまで進出した?!

他方、「前方後円墳勢力」の物部氏（=穂積氏？。尾張系を含むかどうかは微妙である？）の勢力（最後の弥生式土器・庄内式土器をもつ、日神（太陽）・竜王山信仰→魏系？）は、同じように播磨を經由して、大阪河内から、別途？大和・河内を流れる大和川水系を利用して、奈良盆地南部の畝傍山の近くに進出したということである?!

その後、両勢力は、大和（「石上神宮」に近い場所）に集結したが、その中の「前方後方墳勢力」は、同族（仲間？）の「前方後円墳勢力」によって、主導権交代を余儀なくされた（→三輪山山麓纏向祭政都市!）?!

これが、記紀の「出雲の国譲り」の最終モチーフとも考えられるが？、ここでは、「火を祀る手焙形土器」から「日（太陽）を祀る天照御魂神社」へと、そのシンボル（聖地）が移行していった?!多分、これは、一方では、「鉄？」の入手と供給をめぐる対立でもあったろう（これが、「倭国大乱？」のクライマックスでもあった?）?!

ちなみに、太陽信仰とも関わりのある「龍王信仰」（「前方後方墳勢力」のシンボル）は、物部氏や尾張氏とも深い関係があり、こうした太陽信仰の地点に、後々神社（「天照御魂神社」）となる聖地が設定されるのは、物部氏が「（最後の）庄内式土器と前方後円墳の勢力」として台頭し始めた、「3期=210~230年」頃とされる?!

（2）吉備における前方後方墳勢力と前方後円墳勢力の共存状況?!

しかるに、そもそも、上記の両勢力（部族）は、吉備において、どのような共存状況?!にあったのか?!近接または混合状態にあり、「龍王信仰」と「日神（太陽）信仰」という、相通じる宗教?を共有?していた勢力であったが、まずは、北部九州からの青銅器（あるいは鉄?）の原材料の入手困難により、その不満（敵意?）を青銅器（勢力）そのものにぶつけた（手焙形土器=焼き物の採用!）?!

その根拠は、弥生時代中期に、吉備を中心とする「中国ブロック」では、「銅鐸と武器形青銅器の共存地域」から「銅剣の分布域」（北部九州の新たな勢力とのつながり?）に移行していた?!そして、その後の弥生時代後期になると、「青銅製祭器（銅鐸・銅剣・銅戈・銅矛）の空白地域」となっていたということである（青銅の材料不足による「苦し紛れ」の転換?!）!

このように、元々は、「龍王信仰」と「日神（太陽）信仰」という、近接の宗教を有していた両勢力は、「吉備」という地勢故に、青銅器の原材料の入手困難という共通の悩み（弱点?）をもっていた?!だから、共闘した?!しかも、

逸早く「青銅製祭器の空白地域」になったということは、かなり追い込まれた状態であった?!したがって、そこを出て、憎き?青銅器勢力(有力な環濠集落勢力)を攻めた?!そういう説明である?!

だが、それだけでは、吉備を出るということにはならない?!そこに、新たな助っ人(協力者?)が来た?!すなわち、そこに、何らかの外部勢力が流入?してきたのではないか?!多分、それが、九州南部?!から来た、鉄器製作能力をもった?、タケツヌミ(神武?)勢力ではなかったか?!そこで、彼らは大同団結し?、吉備を飛び出せし、青銅器勢力(環濠集落勢力)を攻撃・駆逐することができた?!まさに、こうしたことが推察されるわけである?!

一方、その頃、出雲は、「銅鐸と武器形青銅器の共存地域」であり続けていた(島根県荒神谷遺跡:58本の銅剣・6個の銅鐸・16本の銅矛→弥生中期まで銅鐸と武器形祭器の併用?!ただし、近畿ブロックでも、弥生中期の銅鐸と銅剣の鑄型は一緒に出土?!)!これは、北部九州からの原材料の調達(弥生中期:朝鮮半島産、後に中国大陸産!)が出来ていたからである?!ある意味、西日本では、出雲王国?がその覇を有していた(→葦原中つ国?)?!

その後、西日本は、吉備を中心とした中国ブロックを挟み、「銅鐸分布の近畿・東海・四国(東部)」と「武器形青銅器分布の九州・四国(西部)」に分かれていった?!その意味で、「青銅器」文化は、「吉備」を空白地帯とし、東西で異なる状況となった?!もちろん、これは、吉備の前方後方墳勢力(+前方後円墳勢力)の動きが、関係していることは言うまでもない?!

こうしてみると、まさに「倭国大乱?」は、この時期の青銅器の原材料の輸入と供給をめぐる対立から起こったと考えられ、その流れの中で、弥生の「中期」と「後期」の間に、中国ブロックでは、新たな?勢力(部族)が台頭・進出してきて、その中心地の吉備では、「青銅器」に依拠しない?楯築遺跡等が築かれたということである?!

(3) 吉備勢力の出雲攻略?と近畿・大和への進出?!

ところで、ここの部分で面白い(通説を大いに覆す?!))のは、この吉備勢力が、近畿・東海(さらには九州?)に進出する前に、まずは「出雲」を攻撃・侵略?していたのではないかという指摘である!これが、実は、いわゆる「出雲の国譲り」の祖型ではないのかということであるが、しかもそれが、「記紀」の「スサノオ」の出雲降臨の話とつながる?こともあり、まさに、それを元にしたものではないかというのである?!

物凄い大胆な?指摘であるが、吉備を「高天原」に想定してみれば(かなり蓋然性は高い?!)、まさしくその後の「神話」の流れが、ある意味史実を伝えるもののようにも見えてくるのである?!

では、改めて、その可能性(史実?)は、どのように描かれるのか?!まず、

それは、吉備（赤磐市）の「石上布都魂神社」に、その「出雲の象徴？」でもある「スサノオ」が、何故か？祀られているというところから始まる?!尤も、吉備に、物部氏系の「石上布都魂神社」があること自体は、これまでの考察（紹介）から容易に了解されることであるが、問題は、その物部氏（系）と「スサノオ」に、一体どのようなつながりがあるのかである?!

その答え（ヒント?）は、まさしくスサノオが、出雲で、例のヤマタノオロチを斬った時の刀剣が、物部氏の祭神の「布都御魂^{ふつのみたま}」とされていることにある?!もし、それが史実?を示すものであれば、スサノオは、まさに物部氏（の類縁者?）であったということになる?!しかも、スサノオも、「出雲に追放された」とは言え（この言いつぶりは、その後のスサノオの位置づけの変化、つまり、ある時点から「敵」または「厄介者」扱いにされたということ?!）、一応「高天原勢力」の一員ではあったのであり、物部氏系の神社に祀られていても、さほど驚くことではない?!

さらに、その後の、タケミカツチが大国主に国譲りを迫った時の刀剣が「十拳^{とつか}の剣」とされ、それは（も?）「布都御魂」とされているのである?!また、時代?は前後するが、国生み神である「イザナギ・イザナミ」の部分で、最後に、イザナギが、妻のイザナミを死に追いやった?「カグツチ」を斬った時の剣も「十拳の剣」とされ、別名「天尾羽張^{あめのおはばり}」とも呼ばれたということである!

ここに、いみじくも?「尾張氏」の影がチラつくのであるが、実は、その後出雲を支配した「出雲（臣）氏」（現在の出雲大社の宮司家の先祖!）は尾張氏、正確に言うと、「出雲の国譲り」の時の）高天原からの派遣一番手であった「アメノホヒ」の後裔とされており（本当である!）、その「アメノホヒ」は、その後大国主勢力と仲良くなって?、出雲に同化したという話がある（「出雲国造神賀詞^{いづものくにのみやつこのかむよごと}」では、大和王権に忠実に貢献したと言うが!）?!

だとすれば、その「アメノホヒ」が、ある面「スサノオ」の顔（要素）をもっているのであり、しかも出雲と紀伊の「熊野」の関係（→神武を助けた、尾張氏の「高倉下^{たかくらじ}」）も、より真実味が出てくる?!

と言うのも、周知のように、出雲（東部→意富^{おお}地域）には「熊野神社」があり、西部の「出雲大社」とのつながりは強固なものがある!しかも、（播磨の揖保川流域の）中臣印達^{いたて}神社の祭神は、スサノオの子?とされる「五十猛^{いたける}」であり、その痕跡は、もちろん出雲にも多々あるが、その熊野がある紀伊にも、多々あるのである!

これらについては、ここではこれ以上深入りはできないが、スサノオが、そうした出雲の実情をすべて投影させられている架空の人物?であったとしても、吉備が、まずは出雲に進出したことは間違いなく、その経路は、東部の「日

野ひの川」、そして西部の「斐ひい川」流域であったことも、ほぼ間違いないであろう?!

こうしてみると、吉備の「前方後方墳（手焙形土器）勢力」の一派（後の尾張氏?!）が、龍王の祖先（モデル）としてスサノオを創出したが、その悪しき遍歴?によって、その後の高天原（前方後円墳）勢力から忌避されるようになった?!そういうことであったのではないか?!

なお、吉備は、出雲を手に入れても?、武器形青銅器や銅鐸の祭祀には戻らなかった?!それに代わって、同じ青銅製の鏡を造り始めた?!それは、あの卑弥呼の好物とされた「青銅鏡」であるが、それが、「八咫鏡^{やたのかがみ}」（天照→アマテラス：物部→藤原）、そして「草薙劍^{くさなぎのつるぎ}」（フツノミタマ→タケミカヅチ：出雲→尾張）、「八尺瓊勾玉^{やさかにのまがたま}」（アメノフトダマ：忌部?→中臣?）という「三種の神器」につながっていった?!

こうなってくると、皇室の起源（もちろん、「本来の」という意味である!）は、最早明らかである?!だが、それらは、どのような数奇な?運命を辿ってそうなったのか?!改めて、その辺のところを、注目されるどころとなる?!

(2017. 10. 5)

7 吉備と出雲の関係?!「出雲の国譲り」は、まずは吉備勢力による「出雲進出?」の物語か?!

(1) 出雲による「葦原中つ国」の建国(経営)と吉備勢力の侵入?!

さて、前号(6)にて、吉備からの、(前方後方墳勢力の一派?の)尾張氏の出雲進出(の可能性?)についての、本当に大胆な?!仮説(史実?)を紹介してしまった?!

果たしてそれが、記紀神話の「スサノオの出雲降臨」あるいは、その後の「出雲(大国主)の国譲り」と、どうつながっていくのかということになってくるが(ひょっとしたら?、「吉備津彦」の出雲攻略?→「桃太郎伝説」?に投影?!)、とにかく吉備(とりわけ尾張氏?)と出雲の関係(攻防?と和合?)が、大和政権成立以前に、中国地方(九州地方も含めて?)において展開されていたということになれば、これまでの理解(定説?)を大きく変えることになる!まさしく、とんでもない発見となる?!

すなわち、古代史最大の謎?の事件「出雲の国譲り」(高天原勢力による出雲大国主政権?・葦原中つ国の乗っ取り?!)が、「前方後方墳(手焙形土器・龍王信仰)勢力」と「前方後円墳(日神信仰)勢力」(の和合と離反)によって樹立された「大和王権」、それによってなされているということは分かってきたのであるが、実際それは、具体的に、どこで、どのようになされてきたのか(時代・場所・経緯等)ということである?!

そこには、出雲における、「スサノオ」や「尾張氏」が果たしてきた役割(貢献?)を隠蔽・歪曲するという「記紀」の思惑と、その創作(捏造?)のシナリオが、改めて見えてくるということであるが、換言すれば、仮に、これまで見てきた吉備勢力(その中の前方後円墳 or 円墳?勢力)を、いわゆる「高天原勢力(「大和王権」)」として見立ててみると、「記紀」の重要な部分(神話に隠された真実?!)、つまり吉備勢力の和合と離反の実情が、リアルに見えてくるということである?!

しかるに、件の高天原勢力については、吉備の(から出て行った?)「前方後方墳勢力」と「前方後円墳勢力」(の和合と離反)によって樹立された「大和王権(→纏向祭政都市!))」のことであることは、ほとんど間違いないと思われるが、そうなると、一方の、「国譲り」を強要された「出雲・大国主政権(葦原中つ国)」とは、具体的には、どういう国、勢力(部族)あるいは状況であったのか、そこも、もう少し掘り下げてみる必要があるということになる?!

何故なら、その「大和王権(→纏向祭政都市!))」には、一応は?出雲の要素(影?)が入り込んでいるからである?!例えば、大和王権(→纏向祭政都市!))の象徴としての「前方後円墳」の葺石には、出雲系の?四隅突出型墳丘墓の貼石が採用されている?!

ただし、その「出雲・大国主政権（葦原中つ国）」とは、単に、前にも述べたように、現在、その「大国主命」が祀られている「出雲大社」がある、あの「出雲地方」だけの話ではないことは、これもまた明白なことである！したがって、そのカラクリや本当の史実？とは、一体どういうものであったのか？、そこが知りたいということでもある！

とにかく、「国譲り」をさせられた（乗っ取られた？）ということであれば、逆説的ではあるが？、そこには確かな覇権勢力（中心国家？）としての「出雲」があったのであり、いわゆる「葦原中つ国」を支配（経営？）していたということでもあるわけである？！

というわけで、改めて、この時期（倭国大乱？前後）における、吉備（勢力）と出雲（勢力）の関係に目を向ける必要が出てくるわけであるが、これまで述べてきたように、「出雲の国譲り」とは、神話上の絵空事ではなく、確かに、ある時期の、ある重大な事件？の投影であることは、紛れもない事実なのである？！しかも、それが、まさしく古代史解明の大きな鍵を握っているということでもある？！

（２）出雲の二極化対応？！九州（勢力）と吉備（勢力）の確執・淘汰？！

まず、最初（弥生中期まで）の出雲が、九州（北部）と深く結びついていたことは明らかである（以前紹介した「形質遺伝学」の結果も、そのことを示している？！→出雲と北部九州は同族！←倭人、特に南方からの海人族＝安曇族？の、九州からの移民・進出？！→「出雲タケル」に反映？！）！そして、そこから、まさに「青銅器勢力」として、山陰・北陸・越、さらには信州・関東北部・東北南部にまで、その勢力を伸ばしていった？！

しかも、それは、（その後？）丹波や近江、そして大和葛城？、さらには東海を介して、太平洋側にも展開されていった？！紀伊半島や伊勢湾地域も、当然版図？になっていったということである？！多分これが、記紀に言う「葦原中つ国」の（最大？）版図であったろう？！各地に残る「海人族→安曇族」特有？の地名や神名が、そのことを物語っている？！そうした中、ここでは、「記紀」には出て来ない、同じ奈良時代に編纂された『出雲国風土記』には出てくる、いわゆる「国引き神話」のことが思い出される？！

これは、周知のように、出雲地方における、一種の「国土創世」の物語であるが、最初期の小さな出雲国を広くしようと、八東水臣津野命やつかみずおみづぬのみこと（スサノオの子孫、大国主の祖父？！）が、新羅や隠岐あるいは越の一部？！を、島根半島に引き寄せてきたという話であるが（「菌そのの長浜・稲佐の浜」や佐比売さきひめ山・現在の三瓶さんべ山、あるいは鳥取県側の弓ヶ浜や大山等の雄大な話が展開される！）、それらは、当時の出雲勢力の発展・拡張を示したものであることができるであろう？！

多分、これらは、例の藤井氏の指摘にある、松江市の「田和山遺跡」(弥生中期・「倭国大乱?」以前の出雲の中心地?で、そこは、三重の環濠遺跡だった! 宍道湖を一望できる丘で、そこにある建造物は、出雲大社と同じ造りであった?!)と関わるものであり、その勢力(部族)は、あの「加茂岩倉遺跡」や「荒神谷遺跡」を残した勢力(部族)かもしれない?!

そんな中、具体的に? 思い出されるのが、記紀に書かれている「アメノホヒ」や「天雅^{あめわか}彦」という人物である! 彼らは、例の「タケミカヅチ」や「フツヌシ」の出雲攻略(「国譲り」)に先だって、「高天原勢力(吉備?)」により、同じ目的で出雲に派遣されて(進出して?)いたが、何故か、彼らは出雲に馴染み、同化してしまったとされる?!

特に、「天雅^{あめわか}彦」(アマツクニタマの子。詳細は不明!)は、大国主の娘(事代主と味鋤高彦根の妹・下(高)照姫(→伽耶奈留美?))と結婚までしていた?! とにかく、これは、吉備勢力(の一部)の出雲進出の前触れ?を示すものであり、徐々に出雲が、九州(勢力)と吉備(勢力)の二極化対応に向かって進んでいったことを示すものでもあろう?!

余談ながら、「天雅彦」は、派遣元の高天原勢力(→高皇産霊神)によって殺されることになるが、その葬儀の際に、彼とそっくりの「味鋤高彦根」(大国主命と宗像三女神のタギリビメの間の子。同母の妹が下(高)照姫。)が、その似ていることを「天雅彦」の親に指摘さ(喜ば)れて、(しかし!)激怒し、喪屋を斬り壊したというエピソードまで挿入されている!

なお、その「味鋤高彦根」は、大和?では「迦毛^{かも}大(御)神」と称され、葛城(御所市)の「高鴨神社」(京都の「上賀茂神社」「下鴨神社」の本宮?)の祭神とされている人物(神)である! 農業の神、雷の神、不動産の神として信仰されているらしいが、葛城の賀茂社の鴨氏(鴨氏は出雲から大和に移住したとする説もある?!)が祭っていたとされる?!

蛇足ではあるが、『古事記』で、最初から「大御神」と呼ばれているのは、天照大御神と迦毛大御神だけであるとも言う?!

実は、大いなる謎の人物(神)なのである?!

(3) 改めて、「出雲」とは何だったのか?!

それはともかく、ここでは改めて、山陰地方の特異な古墳形である「四隅突出型墳丘墓」がクローズアップされてくることになる?!

かの藤井氏によれば、その発生・波及経路は、中国地方山間部の「備後・三次」に始まって、出雲西部の斐伊川下流域(西谷古墳群)→松江→日野川下流域(妻木晩田遺跡?)→倉吉→鳥取→(丹後半島・若狭を飛び越えて)→福井→金沢・富山→遠く離れた会津盆地となっているとされる?!

ちなみに、それは、例の「四道将軍」の一人「大彦」(安倍氏の祖)の移動経

路と、重なっているともされる?!

また、一方では、吉備から出雲・伯耆にかけては、「孝霊天皇」(吉備津彦の父親)の伝説・伝承地が多いとされ、大山には「孝霊山・高杉神社」、あるいは複数の「樂樂福ささふく神社」があり、その祭神が「孝霊天皇」とされているということである?!

これらは、いわゆる「欠史八代」とされる、とりわけ(第5代)孝昭天皇＝ワニ系の始祖(手焙形土器と前方後方墳勢力の祖?)、(第7代)孝霊天皇＝物部系(太陽信仰と前方後円墳勢力の祖?)、(第8代)孝元天皇＝安倍系(ワニ系に近い同族?)の始祖(→子の大彦は、武埴安彦の異母兄弟?)というような形で、後の「万世一系」の枠組みに入れてあるということでもある?!

これらが、まさに出雲の変貌(吉備勢力の侵入・進出?!)を示すものであることは、おそらく間違いないであろう?!「アメノホヒ」(尾張系)関係については、先に述べた通りであるが、このように、出雲・山陰においては、「欠史八代」の天皇?の影が、色濃く感じ取れるのでもある?!

改めて、これは、一体どういうことなのだろうかということであるが、「高天原勢力」が、吉備、そしてアメノホヒが進出し、領有を深めていった出雲との「巨大混合?勢力」であったならば、ある意味容易に納得は出来るものと思われる?!さらにまた、大国主の子(母宗像三女神タギリヒメ?!)である「味鋤高彦根(賀茂族の長?)」が、何故「出雲の国譲り」に反対しなかったのか?!それはまた、九州宗像族と組んだ出雲(の一派?)が、後の大和政権に加わったからでもあろう?!

ちなみに、記紀に出て来る出雲振根(タケル?)と飯入根の関係であるが、これについては、例の「出雲の神宝検校事件」で、崇神天皇が、物部十千根を遣わして、出雲の神宝を見たい(→支配したい!)と言った時に、兄の「出雲振根」が九州に行って留守をしていた隙?に、弟の「飯入根」がそれを受諾したという事件が記されている!

まさに、その逸話?は、当時の出雲の対応が、九州勢力と吉備勢力への、二つの方向に分かれていたということを示すものである?!つまり、これは、出雲の二極化と、それを実現させた?、九州勢力と吉備(→大和)勢力の確執・淘汰を表すものということである?!

最後に、ここで俄然気になってくるのが、「スサノオ」の役割?である?!彼が、出雲での「八岐大蛇退治」の際に、かの「フツノミタマ」(青銅剣?)で切り刻んだ蛇身から、かの有名な「草薙の剣」(鉄剣?)が出てきたとされているが、記紀では、それを、スサノオが「天照大神」に献上したということになっている?!

しかし、何故か、それが、(その後)尾張氏の根拠「熱田神宮」に奉斎され

ている?!前からこの関係を訝しく思っていたが、その話が、今回の、尾張氏による「出雲攻略」のことを投影したものであれば、まさしく辻褄が合う?!

もちろん、そこに、例の「ヤマトタケル」が、叔母の「倭姫」(崇神の子?開花天皇の娘・景行天皇の妹)から、東国征討に出かける際に手向けられたという話が挿入?されてくるが、改めてこの「剣」は、尾張氏の「出雲での奮闘ぶり?」を示すものとして、受け止められるということになる!

その状況こそが、ここで言う「出雲」なのであり、大和纏向(祭政都市)を主導したとされる「吉備」、あるいはその陰の大立者と目される?「尾張」との関係なのである?!ただし、そこには、その後の大和の出雲系、例えば倭^{やまと}氏(←海人族・珍彦 or 椎根津彦)とか、三輪氏、さらには賀茂氏、葛城氏等が絡んでくる?!是非、これについては、稿を改めたい?!

(2017. 10. 19)

8 「銅鐸」「巴形銅器」は、誰（どのような勢力）が使用し、その結末はどのようになったのか?!

(1) 「銅鐸」、その後の「巴形銅器」の出土の意味するもの?!

ここで、一度、いわゆる「銅鐸」、あるいはそれと連動?した「巴形銅器」（楯の飾りにされた武具?!南西諸島産のスイジガイに由来?）のことについて、少しまとめておきたい!

例の藤井耕一郎氏によれば、弥生中期に「環濠集落」を形成していた勢力は、弥生後期（2世紀後半、180年頃?）の「倭国大乱?」時に、中国地方の吉備から出来た「手焙形土器・前方後方墳勢力＝ワニ勢力」によって駆逐されたとされるが、彼らは、それより先に日本列島、とりわけ北部九州に渡来、入植?していた、南方（呉?）系海人族、つまり「安曇族?」だった?!

その代表的な居住（根拠?）地が、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）、唐古・鍵遺跡（奈良県）、朝日遺跡（愛知県）等とされるが、彼らは、「銅鐸」と呼ばれる、「共同体祭祀用」の青銅器を使用していた?!

したがって、彼らは同族?だと分かるのであるが、吉備の「手焙形土器と前方後方墳勢力＝ワニ勢力」に攻め込まれていた頃、それに対抗するために、「対ワニ連合?」とも言うべき?）相互防衛の協力関係を結んでいた?!その「協力関係の証し」が、「巴形銅器」であったとされるのである（ただし、それ自体は、ある一時期だけのもの!）?!

さて、この、弥生後期に出現し、弥生終末期には消滅したとされる「巴形銅器」は、吉野ヶ里遺跡を含めて、その鋳型は、北部九州でのみ出土とするとされる!例えば、香川県さぬき市（森広遺跡）で出土した「巴形銅器」は、福岡県春日市付近（九州筑紫地区遺跡群）で発見された鋳型から作られた!

すなわち、巴形銅器の鋳型は、北部九州の3ヶ所（もう一つは、福岡市那珂遺跡）のみで出土しており（唐古・鍵遺跡と朝日西遺跡で出土したものも九州産!）、その意味で、この「巴形銅器」を使用していた勢力（部族）は、北部九州から近畿・東海へと入植・移動していた勢力（部族）なのではないか（少なくとも、大いに交易を行っていた!→仲間?!）?!

しかも、その出土状況から、近畿・東海にいた、その勢力（部族）は、ある時期、短期間の内に別の所へ移動、または同盟?を結んでいたのではないかとということである（それだけ、事態が切迫していた?）?!

その原因?である「手焙形土器・前方後方墳勢力」、すなわちワニ系勢力の全国展開?については、既に紹介した通りであるが、とにかく、この「銅鐸」勢力でもあった「巴形銅器」勢力は、北部九州から各地に拡散していった?と考えられ、その後、近畿・東海に移っていた勢力は、東海（三河・遠江）から関東（相模）へ追いやられ（数十人の規模で集団移住・環濠集落→神奈川県綾瀬市

神崎遺跡)、最終的には、短期間で消滅していったらしい?!

ちなみに、その弥生期の巴形銅器は、対馬が西限、茨城県が東限とされており、これは、別な意味で?非常に注目されるものではある?!何故なら、弥生期の銅鐸・巴形銅器勢力(環濠集落勢力)は、ある時期全国に散らばっていたことが分かるからである?!少なくとも、最初の広域国家?(→倭人ネットワーク?)は、この銅鐸・巴形銅器勢力(環濠集落勢力)によって形成されていたと言えるのである?!

ただし、この「巴形銅器」は、約100年後の古墳時代には復活?したとされる?!とは言え、その古墳期のもの(→4枚羽根に規格化)は、分布の中心が近畿であり、しかも興味深いことに、朝鮮半島南部(伽耶)から、全体の半数が集中的に出土しているらしい?!

このことは、以前の銅鐸・巴形銅器勢力(環濠集落勢力)の後裔(同族?!)で、しかもかなりの「統率力のある」リーダー(集団)が、当時朝鮮半島南部に進出していたことを示すものでもある?!果たして、彼らは、以前の「海人族→安曇族?!」の後裔、あるいは同族?であったのか?!

これに関わって、先の藤井氏は、前方後方(+円?)墳勢力=「ワニ系氏族」が、後の「臣」姓(和邇/和珥氏・春日氏・大宅氏・栗田氏・小野氏・柿本氏・多(意富)氏・阿倍/阿閉氏・出雲氏・吉備上道氏・吉備下道氏)であり、「物部氏族」が、「連」姓(物部氏・中臣氏・大伴氏・佐伯氏・安曇氏・忌部氏・尾張氏)とされているが、「臣」姓のワニ氏族の、ある時期の「王座奪回」に際して、上記の、かつての「銅鐸・巴形銅器勢力」の後裔が協力したのではないかとされている?!ある意味、大いにあり得るのではないだろうか?!

これは、私の勝手な?推測であるが、そのリーダー(集団)は、おそらく安曇磯良いそら(安曇族の後裔主流?)であったろうが、彼らを動かして?いたのは、葛城氏(→襲津彦?)だったのではないかと?!そのことを示す(匂わす?)、「記紀」の記事があったようにも思う(ただし、彼については、良くは書かれていない?!)。

先の藤井氏は、その後の、もう一つの勢力として、「武内宿禰系」(葛城氏・巨勢氏・紀氏←海部氏?!・平群氏・蘇我氏)を挙げているが、実は、この勢力が、その後の倭国?を大いに左右することになる?!これについては、次の大きな局面(第2ステージ)の解明ということで、稿を改めて考察の対象とするつもりである!

(2)安曇族が残した?当時の三つの代表的遺跡(1000人規模の巨大環濠集落!)

ということで、ここでは、そのことはひとまず置くとして、折角でもあるので、先に挙げた、弥生中期から後期にかけての三つの代表的遺跡について、簡単に紹介しておくことにしたい!もちろん、藤井氏の本による!

まず、佐賀県神埼郡吉野ヶ里町・神埼市の「吉野ヶ里遺跡」である。ここに

は、物見櫓、祭殿、青銅器鑄造工房があり、銅劍、銅劍鑄型、銅矛鑄型、遺跡の周辺から銅鐸(中期の福田型→ただし、これについては、私はよく分からない!)、その他の青銅器、そして、巴形銅器の鑄型が見つかっているという。推定人口1200人!古墳時代に住居が激減し、3世紀後半に、丘陵部に前方後方墳が造られ(外部勢力の征服?!)、その象徴である?「手焙形土器」も出現している!

次が、奈良県田原本町の「唐古・鍵遺跡」である。推定人口1000人!大型建物、銅鐸片と銅鐸鑄型(中期袈裟襷文)が出ており、青銅器の鑄造工房で、銅鐸を量産していたものと思われる?!「巴形銅器」の破片、複数の手焙形土器も出ており、吉備からの「前方後方墳勢力」に攻撃されたことは明らかであるとされる?!

古墳時代に環濠は消滅し、湿地帯化していたが、6~7世紀に、中央部に前方後円墳が出現している(新たな勢力の征服?!)?!有名な、江南地方の「呉」を連想させる「舟形絵画土器?」が発見されているのも、この遺跡である!

最後が、愛知県清須市・名古屋市西区の「朝日遺跡」である。推定人口1000人!大型建物、銅鐸と銅鐸片(袈裟襷文)、近畿式銅鐸の飾り耳、銅鐸鑄型(最古級の菱環鈕りょうかんちゅう式)、手焙形土器16点が出土。隣接の「朝日西遺跡」からは、完全な巴形銅器も出現しているという。

ここも古墳時代になって、集落から住人が消え、沼沢地となったが、5世紀頃、集落跡の中央に「円墳」が築造されている(新たな勢力の征服?!)?!

なお、「唐古・鍵遺跡」と「朝日遺跡」は、以前から兄弟の関係とされており、その後、「銅鐸の祭り」に使う道具を統合・結束化もしているという?!

いずれにしても、これらの勢力(部族)は、同じ時期に忽然と姿を消した青銅製祭器(銅鐸)勢力であるが、ひょっとしたら、彼らの故郷は?、「吉野ヶ里」であったかもしれない?!

なお、「銅鐸」は、弥生中期の、紀元前3世紀頃に出現したとされ、弥生後期に大型化し(近畿式と三遠式→三遠式は近畿式より先に消滅!)、その後、その大型銅鐸は近畿式に一本化されたという?!その最後の銅鐸の代表が、滋賀県の「大岩山遺跡」のものであるが、「銅鐸」は、弥生中期までは近畿・東海から中国四国まで分布し、九州では、その中期までは、北部九州でも作られていた!

だが、周知のように、「記紀」は、銅鐸のことを隠匿(無視?)している?!要は、銅鐸・巴形銅器勢力(環濠集落勢力)の存在を知られたくないということである?!

(3)「銅鐸・巴形銅器勢力」から「手焙形土器・前方後方墳勢力」へ、そして、「前方後円墳勢力」へ?!

最後に、改めて、上記の「銅鐸・巴形銅器勢力(環濠集落勢力)」を駆逐した勢力(部族)、すなわち前方後方墳・手焙形土器勢力が、列島各地に広がって

いく様子を整理しておきたい！

まず、前方後方墳・手焙形土器勢力は、吉備から、出雲・越・近江を經由して、伊勢湾、そして東海以東・上毛地域にまで進出していく?!その痕跡（証拠）が、例えば、3世紀最古級の前方後方墳とされる、駿河の狩野川、三河の豊川、相模の相模川流域の前方後方墳であり、これらを築造した勢力（＜龍王＞ワニ氏族）が、関東地方にまで、その版図を広げていたわけである?!

それに追われて、紀元 180 年頃、東海（三河・遠江）から関東（相模）へ数十人の規模で集団移住した環濠集落勢力が、神奈川県綾瀬市の神崎遺跡等を残した勢力でもある!

このように、（先住者の）環濠集落に古墳を築いたのは、「権力者を神として祭り上げる階級社会」の外部勢力（新しい渡来者?）であり、それが、すなわち「古墳時代の始まり」とされているが、この古墳（前方後方墳）時代の到来は、九州より駿河の方が早かったということでもある?!

一方、九州では、弥生後期には、銅鐸とは別の「武器形青銅器（銅剣・銅矛・銅戈）の文化圏」を形成していた!そこには、同じ青銅器勢力ではあるが、別の勢力（部族）が進出してきたものと思われる?!ちなみに、そこでは、弥生後期まで広形銅矛が使用されたが、弥生終末期に消滅した?!銅矛・銅戈は、北部九州中心であるが、銅戈は、大阪湾周辺や長野県からも出土しているという?!

その後、弥生の「中期」と「後期」の間に、中国地方に新たな勢力が台頭・進出してきた、彼らは、前方後方墳勢力と共存しながらも、徐々に前方後円墳勢力として、全国展開をしていく。その証拠?に、巨大前方後円墳の出現と入れ替わるように、前方後方墳勢力の象徴である手焙形土器が消滅しているのである!

繰り返すように、この勢力も、直接的には吉備から出来しているのであるが、私は、これらの勢力（部族）は、もともとは倭（面土→伊観?→伊都?→怡土）→ヤマト（邪馬台?）→倭・大倭・大和につながっていくものと考えている?!

さらに、これも、私の推測の域を越えないが、その後、前方後方墳勢力?の中に、新羅（伽耶?）から来訪したとされる天日矛（勢力）が、播磨を通じて割り込んできたとされるが、彼は、例の関裕二氏が解明されているように、丹波・丹後と若狭湾沿岸部に進出し、鉄の流通・配分の主導権を確立していった（天日矛→出石神社→氣比大神?）?!

しかし、何故か?、彼らは、出雲（or 近江?）勢力の一員として扱われている?!しかも、その事績は、事代主（武内宿禰→住吉大神→浦島太郎?）や竹野姫（神功皇后→豊受大神?→羽衣伝説?）、そして両者の?伊勢神宮（内宮・外宮）につながっていくようにも描かれている?!

とにかく、これらについても、次のステージで詳しく追ってみることにす

る！

参考までに、以下、藤尾慎一郎氏の『＜新＞弥生時代』（吉川弘文館、2011年）の、弥生終末期における「古墳時代への三つの転換パターン」を紹介しておきたい（藤井氏の本で紹介されている！）。

A類型：水田稲作→環濠集落→青銅器祭祀→古墳時代：九州中部から福井～天竜川を結ぶ線までの地域

B類型：水田稲作→環濠集落→古墳時代：関東、中部、九州南部、越後など

C類型：水田稲作→古墳時代：利根川以北の北関東と東北南部・中部

これらは、まさに弥生時代における各勢力（部族）、端的には、前方後方墳・前方後円墳勢力の分布・移動（進出・消滅）の大枠を示すものである?! 「環濠集落→青銅器祭祀の期間」（環濠集落・青銅器祭祀集団の先住）があったところとそうでないところの特徴が、よく分かる分析である?!

(2017. 10. 29)

9 「古墳」と、各勢力（氏族）の集散離合?! その出現状況から見えてくる、具体的な真相?!

(1) 「古墳」は、被葬者や一族の偉業、威容、「アイデンティティ（同族・帰属意識）」示す場所であった?!

これまで、吉備の「前方後方（+円?）墳勢力」の一団（混合勢力?）が、まずは「出雲」に進出?し（スサノオの出雲降臨→大国主の「出雲の国譲り」に投影?!）、そこでの、一定の和合?の後、その吉備と出雲?の両勢力（の主力?）が、（丹波・播磨→?）河内を經由して、一方が「近江」、さらには越、東海へ、そしてもう一方が「大和」（葛城→紀伊・熊野?）へ進出した。

その後、両勢力は、「大和」の三輪山麓（纏向）に集結して、最終的には「前方後円墳勢力（饒速日集団?）」が、いわゆる「(初期)大和王権」を樹立した?ということ、「手焙形土器」（「前方後方墳勢力」の象徴!）の出現状況の解明?（藤井耕一郎氏）から、明らかにしてきた?!

しかしながら、我々は、一方でまた、まさにその考古学の成果から、すなわち、そこを契機として生じて来る、多様な? 「古墳」の出現状況（分布や形状あるいはその大きさ等）の解明から、上記の関係勢力（氏族）の移動や関係、あるいは彼らの集散離合の実態?を、より具体的に見て取ることができる?!

何故なら、以前にも確認したように、「古墳」とは、まずは誰かの「墳墓」であり、その被葬者の出自や生前の偉業を示し、偲ぶものではあるが、それと同時に、それはまた、一族（縁者）の祖先（神）となった、その被葬者への感謝と祈り（祖先崇拜?）の場でもあった?!

したがって、「古墳」とは、その被葬者の偉大さ・威容を示すとともに、まさに一族としての「アイデンティティ（同族・帰属意識）」の確認・高揚の場所・空間であり、特に、その形状については、ある種のこだわり（意趣・プライド・意地?）が込められているということでもあった?!

例えば、（攻め滅ぼした、先住者?の）環濠集落跡に、そうした古墳を築くということは、「(当該の)権力者を神として祭り上げる階級社会」を形成していた勢力（外からの侵入者?）の、自他に対する示威行為であり、それが、すなわち「古墳時代の始まり」でもあったわけである?!

もちろん、それは、最初の?古墳であった「前方後方墳」のことであるが、その性格（外部から来て、その威容を示すということ!）は、基本的には、どの「古墳」においても妥当するのではないか?!とりわけ、その大きさには、そうした意味合いが込められてもいる?!

しかしながら、そうした「古墳」について、今回ネット上で確認したが、形状や大きさ自体もそうであるが、様式（作り方）等、実に様々なものがある（装飾や壁画等も含めて!）!そうしたこともあるので、ここでは、その辺の細か

いところにまでは深入り？しない（出来ない！）が、そこには、それらを造った人々の思想や文化（生活様式やその伝統も含めた！）が色濃く投影されていることは、改めて述べるまでもないことであろう？！

しかるに、この「古墳」、とりわけ、その個々の「形状」や「大きさ」については、これまで、かなりの究明がなされているようであり（ほぼ定説化している?!）、それぞれの「古墳」の被葬者や築造年代等についても、異論・反論もそれなりにあるようではあるが、ほぼ解明されてはいるわけである？！

だが、誰（どこの勢力）が、どのような背景・経緯で、そして何故、そこに築造したのか、つまり、その古墳の分布状況等の全体的な意味合いについては、ほとんど解明されてはいなかったのではないだろうか？！

そこで、今回、少なくとも前方後方墳（勢力）と前方後円墳（勢力）の出自や関係、そして、それらの動き（移動や進出先等）が、その背景・経緯等も含めて明らかとなってきたのである？！

端的に、「前方後方墳」は、「出雲」あるいは「近江・東海」勢力（→ワニ系氏族、尾張氏も？）のシンボルで、一方の「前方後円墳」は、吉備の「太陽（日神）信仰族」（楯築遺跡：岡山県倉敷市矢部にある墳丘墓。形状は双方中円形墳丘墓。その墳丘墓上に環状列石あり。）が、その「前方後方墳」勢力、すなわち同じ地域？に居住していた「龍王信仰族」（ワニ系氏族）と一緒に（銅鐸・巴形銅器勢力を打倒するために？）、2世紀後半に？、（出雲を経由して？）近畿・東海に移動して、最終的に大和に樹立させた「大和王権」のシンボルであった？といった具合である！

（２）「方墳」と「円墳」、そして、その複合化は何を意味するのか？！

ただし、それ以上のことは、ひとまずここでは置いておくことにして、まずは改めて私なりに、その「古墳」の形状やその分布状況等を、以下、少し整理しておきたい！

- ・方墳：原型は方丘墓で、その起源は、朝鮮各地にも見られる方形周溝墓ではないか?!弥生初期の北九州に多く、それらは、出雲・越・近江→東海以東→伊勢湾・上毛地域へと広がっている?!
- ・前方後方墳：方墳＋方墳？→近江で発生したとみられ、吉備のワニ氏族（火焙形土器・龍王信仰勢力）の結集を象徴するもののようなものである?!ちなみに、この前方後方墳の出現（古墳時代）は、九州より駿河の方が早かったようである?!このことから、前方後方墳＝ワニ氏族（火焙形土器・龍王信仰勢力）の動きが、具体的に分かる?!

だが、前方後方墳が、「方墳（勢力）」同士（志？）の「合成墓」なのか、それとも、単独の「方墳」を基にした、ある時期からの意匠の変化（→王権の表象？）なのか、その辺りはよく分からない?!しかも、関係各氏族が、単

純にそうした振り分け（ワニ氏族／火焔形土器・龍王信仰勢力かどうか？）に馴染むのかどうかも、かなり疑問ではある?!特に、「尾張氏」や「安曇氏」には、そうした疑念が深くまとわりつく?!

- ・四隅突出型墳丘墓：一応？方墳の一種だと考えられるが、出雲と北陸（越）に特有で（2世紀末頃出現?）、その原型は、高句麗の積石塚墳丘墓だとも見られている?!

中国山地の山間部（三次地方）で出現し、出雲から東側日本海沿岸地域へと広がったということである?!伯耆国（鳥取県）の「麦木晩田^{むきばんた}遺跡」も注目されるが、何と言っても、出雲の斐伊川流域?の「西谷墳墓群」が注目される?!

- ・円墳：原型は円丘墓で、その起源は、中国江南?と見られ、朝鮮南西部・百済にも見られるようである?!国内では、瀬戸内沿岸（吉備中心?）から近畿に伝わったとされる?!
- ・前方後円墳：方墳＋円墳?→いわゆるヤマト王権の全国制覇?に伴って、全国各地に築造された古墳の形状で、おそらく吉備勢力と近江勢力の合同と離反、その結末?としての大和王権の樹立の象徴（方墳勢力と円墳勢力の和合・同盟→大和纏向祭政都市）と見られる?!

ただし、全体としては、吉備（楯築遺跡→特殊器台等）、出雲（四隅突出型墳墓→葺石）、近畿（周溝墓→周溝）及び九州（副葬品→三種の神器?）の様式の寄せ集めとも言われる?!そこに、どのような意図あるいは経緯があるのか?!いずれにしても、前方後円墳（勢力）が、「方墳（勢力）」と「円墳（勢力）」同士（志?）の「合成墓」であることは間違いない?!

ちなみに、7世紀前半の、いわゆる「物部氏」の失脚に伴って、前方後円墳（古墳全体?）は、衰微の一途を辿ったともされる?!やはり、前方後円墳は、吉備出身?の物部氏（饒速日?）のレガリア（王権）を示すものだったのであろうか?!

一応?、以上のようなことであるが、全体的には、「円墳」が吉備（→物部氏）、「方墳」が出雲（→蘇我氏?）の要素ではあろう?!

ちなみに、後者の「方墳」と、同じ山陰・出雲で盛行した「四隅突出型墳丘墓（方墳?）」が、どのようにつながるのか?!「四隅突出型墳丘墓（方墳?）」は、いわゆる高句麗とのつながりも指摘されているが、今のところ私には、よく整理がつかない（越の大彦系・阿倍氏とも、言われている?!）?!

それと、出雲（族）、とりわけ大和（葛城）の出雲（族）あるいは賀茂（族）が、それとどうつながるのかも、まだまだはっきりとしない?!

なお、ここでは余談ではあるが、例の「卑弥呼」の墓（塚^{ちやう}）が「径百余歩」とあり、円墳を想定させるが?、その円墳勢力が彼女を「共立」したのか、

それとも可能性として考えられる、「前方後方墳」勢力（和珥勢力→スサノオ勢力？）と前方後円墳勢力（物部氏？→高天原勢力？）の妥協の産物なのかも、今のところはまったく分からない?!ひょっとしたら、まだまだその時は、（九州の？）円墳勢力が、彼女を「共立」していたとも考えられる?!

これについては、残念ながら、その墓（塚ちょう）が発見、特定されなければ何とも言えない?!

（3）古墳の波及状況とその終焉の理由?!

ところで、古墳と言え、何と言っても「前方後円墳」ということになる?!そして、そこで有名なのが、容積?では世界第一位とされる、大阪河内の百舌鳥古墳群の「大仙古墳」（伝仁徳天皇陵）、あるいは最初期の大和纏向の「箸墓＝箸中山古墳（伝倭迹迹日百襲姫命陵?!）」であろう（後者は、周知のように、邪馬台国畿内説が、「卑弥呼の墓」と主張するものでもある?!）!

いずれにしても、先に示したように、各古墳の形状と大きさ、及びその分布状況から、当時の各勢力（部族）、そして、それらの移動や同盟?の対応関係が、徐々に明らかにされてきているのであり、そうした状況の中で、改めて「前方後円墳」が、それ一つで、ある勢力（氏族）単独の墳墓なのではなく、いわゆる「円墳」と「方墳」の「合成墓」なのではないかということが、特にここでは注目されるであろう!

現時点では、ある種の運命共同体的な「合成墓」であり、その擬制的親族集団化を示すものではなかったのかということである!?

その証拠（根拠）が、「円墳」と「方墳」の合体、そしてそこにおける、例えば「高坏」・「特殊器台→埴輪」「貼石」「周濠」、さらには「副葬品」等の、言わば関係氏族・一族（集団）の墓制の中核的要素の共存・融合性であり、まさにそれらが、合成・合体されているのではないかということである!

もちろん、一方の「前方後方墳」も、ある意味、このような観点でみると、一つの合成墓だと言えるのかもしれない?!

繰り返しになるが、「前方後円墳」は、7世紀前半の、「物部氏」の没落ととも、消滅していくという説もある?!しかし、それは、単なる偶然なのか?あるいは大いに関係があるのか?

もし、関係があるのならば、「前方後円墳」の出現は、まさに「物部氏」と直接つながっており、墳墓自体は、一番「吉備」の要素が強いとされているので（「高坏」「特殊器台」<→埴輪>等）、その物部氏は、「吉備」の出だということにもなるわけである（「物部氏」主導・中心で、その墳墓は出来上がったもの→大和王権の盟主?!）?!

ただし、私は、その吉備勢力も、ある時からそこに出来したものであり、おそらく朝鮮半島南部（伽耶地方）から、九州を経由して、瀬戸内沿いに移動し

てきた勢力（部族）だと考えてはいるわけである?!

なお、吉備から出立し、近畿で前方後方墳勢力を形成した部族達が、東海より少し遅れて九州に進出した（吉野ヶ里環濠集落を討滅?）ということであるが、具体的には、それは誰（どの勢力）であったのか?!

思い出されるのは、本当は不思議な人物ではあるが?、例の「多氏」、そして、「火（肥）の君」「阿蘇の君」「大分の君」「伊予国造」等の始祖とされる人物（神?）で、神武の子（姫蹈鞬五十鈴媛との間の長男）とされる「神八井耳」である（弟が、第2代「綏靖」である!）?!

その「神八井耳」（に仮託された人物）が、その前方後方（+円）墳勢力と何らかの関係があったことは間違いない?!「神武」の子とされているが、邪馬台国（連合）・卑弥呼が登場する前に、例の「吉野ヶ里（遺跡）」を攻撃した勢力（部族）なのか、はたまた「耆与」の共立前の勢力（部族）なのか、とにかくこの部分は、別な意味で関心がもたれるところでもある?!

(2017. 11. 5)

10 「丹波・近江」の九州進出？と応神（百濟）勢力との出会い・和合?!そして、「近畿・大和」への進出?!

(1) 以前掲げた6つの大きな局面（歴史の転換点?!）は、大きくは、3つの山?に束ねることができる?!

さて、私は、この新シリーズ「さらなる真相を求めて」（1）で、6つの大きな局面（ある意味歴史の転換点?!）を想定し、そこでの史実? 解明が、我が国「古代史」の全容を明らかにする「大前提=鍵」であることを指摘（推測?）している!

以下は、それを再掲するものであるが、紙幅の都合上、多少短縮あるいは改変を施しているものもある!

① 2世紀後半の「倭国大乱」は、北部九州沿岸部の「奴国」と有明海沿岸部の「邪馬台国」勢力との覇権争いであった?! 結果は、「邪馬台国」勢力の勝利と、「奴国」勢力の、（北部九州からの）敗北・逃走である。後者の余波が、瀬戸内海沿岸部における「高地性集落」の出現である?!

ただし、「邪馬台国」勢力の背後に、吉備・出雲の前方後方墳勢力が絡んでいたかもしれない?! これが、実は、西日本全体を混乱に陥れた、全体の「倭国大乱?」であった?!

② 3世紀初頭、近畿・大和に、（九州）倭国（邪馬台国連合）に対抗するため、近江・尾張・越・出雲、そして吉備勢力が、河内、近江を經由して、大和（纏向）に大同集結した。その後、出雲の蹴落としを敢行しながら、近畿・大和勢力（「大和王権」）は、（九州）倭国（邪馬台国連合）を飲み込んで（征服して?）いく!

それらは、例の神功皇后・仲哀・武内宿禰説話に投影されており?!、一方でまた、彼らは、東海・関東・東北にも、その版図を広げていく。しかし、（九州）倭国（邪馬台国連合）自体は筑後地方に残り（→大倭^{たい}国?）、「倭国」の本家筋として、8世紀初頭まで存続した?!

③ 4世紀初頭、百濟王族宗家（沸流系余氏）の「^と藤→高良大明神→武内宿禰?」（応神のモデル?!）が「貴（木 or 基肆）国」（「邪馬台国」の一領域）へ渡来してきて、「大倭→倭^{たい}国?」を成した?! そこから、「倭の五王」（讚・珍・済・興・武）が登場してくる?! 「済」の時、血統が温祚系余氏へと移り、当時の百濟との関係が強まっていく! 有名な「武」は、この時の最後の? 王である?!

なお、この時「（出雲系を飲み込んだ?）^と藤→讚→応神? 勢力」と「大和王権」勢力の確執・関係が、記紀において一番誤魔化し（^{ぼかし}）が多い?!

④ 5世紀後半、百濟王族（仇台系余→牟氏）軍君^{男弟王}が、当時の百濟王家筋（温祚系余氏）の（筑紫）倭国の磐井（武?）を、物部麤鹿（火）と共に滅ぼす（「磐井の乱」）。九州で麤鹿（火）が政権を構えたが、麤鹿（火）の死後、その倭

国本宗家？は二つに分かれた。ちなみに、尾輿系から蘇我氏（弟・稲目）が分かれる（→上宮王家）。

一方、（豊国）倭国の軍君^{男弟王}（第一「継体」？）勢力は、近畿河内・近江・越に移動（息長氏→彦太尊？・第二「継体」？）！その後6世紀初頭、半島情勢の悪化に伴って、蘇我氏（→上宮王家）も近畿へ移動し（播磨→河内→飛鳥。倭国勢力の有力部分？）、彼らは、近畿・大和に集結した?!ただし、九州（筑紫）倭国（本家筋）は残っていた（→600年アメタラシヒコ・日出処天子）！

⑤その九州に残っていた（筑紫）倭国王家筋（百済王族温祚系余氏）は、663年の「白村江の戦い」で壊滅?!先に近畿へ移動していた、一応その王家筋の一人・中大兄皇子（天智）が、中臣鎌足（こちらも百済系王族≒余豊璋？）に唆^そそ^かされて、大和飛鳥に移動していた蘇我氏本宗家（→上宮王家）を滅ぼし（645年「乙巳の変」）、近江に遷都し、改めて「（筑紫）倭国王→日本国王」を名乗った！ここに、「九州（筑紫）倭国」から「近畿倭国→日本国」への、事実上の変位が成就する！

⑥だが、672年の「壬申の乱」において、蘇我氏（→上宮王家）の血を引く天武（尾輿→蘇我氏→上宮王家＝（筑紫）倭国王家）が政権を奪還する?!しかしまた、その天武の死後、持統・藤原（不比等）体制が、再度（巧妙に？）倭国王権（上宮王家）から日本国（天智）王権を奪還する。そして、701年の「大宝律令」によって、（倭国→日本国）王権の完全成就がなる！

ただし、この後も、天武系と天智系（→藤原氏）の相克は続く！しかし、徐々に天智系（→藤原氏）が政権を固めていき（独占化）、桓武の時に、まさにそれが完遂する！

という流れ（ストーリー）であるが、①と②、あるいはそのつながりの説明は、多少変更（修正）が必要な部分もあるように思われるが、これまでの考察（紹介）で、一応終わったような気もする（現時点では、これ以上は、新機軸が見えてこないということも含めて!）?!（→「Part 1」）

もちろん、それにしても（それだからこそ?）、まだまだ課題（不分明さ）は多々残る?!例えば、「初期ヤマト王権」における「饒速日（先発天孫族?!）」や「長脛彦」の正体と、その関係、あるいは第10代の「崇神天皇」の氏・素性等、数え上げればキリがない?!

しかしながら、大枠としては、2世紀後半頃から、吉備から出発していった「前方後方（+円）墳勢力」（ワニ系氏族）が出雲を引き込みながら?、河内を經由して、近江や大和を拠点に、そして、最終的には大和纏向に、九州倭国（邪馬台国連合）に対抗?する「大和王権」を樹立していったことは、ほぼ間違いないということである?!

そこで、次に、これからは、「記紀」が「一番煙に巻いている（真相を隠そう

としている!))、(①と②を受けた?) ③と④、あるいは、それらのつながりの部分?の、さらなる(具体的な?) 解明へと向かうこととする!

ちなみに、先の①から⑥までの局面(流れ・ストーリー)は、改めて大きくは、次の三つの山?から成り立っているようにも思われる?!すなわち、

①180年頃?の「倭国大乱?」の様相は、九州南部から来た「タケツヌミ」勢力(中国江南地方からの九州移住→倭人や「倭国」「奴国」等の存在を投影?)の移動(→神武)と、朝鮮半島南部から九州経由で来た、吉備の「伽耶勢力」・手焙形土器/前方後方(+円)墳勢力(ワニ系氏族→崇神)との和合と離反を示している?!その中で、(九州)倭国では、その和合と離反の影響から形成された?「邪馬台国(連合)」が登場してきた?!

②次は、上記のようにして出来上がった、近畿の「大和王権」の全国支配と、そこにおける「(九州)倭国」との軋轢ないし並立(そこへの百済系王族の進出?!→応神)状態が出来する?!ただし、本来は、(九州)倭国に王権の大本があり、そこに居た、あるいはそこを経由した、(百済王族本宗家)の末裔(上宮王家→蘇我氏?)が、大陸・半島情勢の変化等もあり、近畿大和に東遷した?!

③そして、次が、そこから生まれた「天智系」(→九州倭国系?)と「天武系」(→九州倭国系・上宮王家筋?)の確執と、天智系の勝利?→藤原氏の政権掌握!ということである?!ここから、その後の我が国は、知られている(確定された)歴史となる?!

いずれにしても、上記のような流れ(事実?)において、我が国においては、百済の王統の血筋が天皇家を形成してきたことは間違いないと思われるが、それは、かつて異民族・別の国の支配を受けていたということでは決してないということである?!

つまり、「縄文人」や「弥生人」、あるいは「渡来人」や「帰化人」、さらには「倭人」とかというような言い方もあるが、長い年月において、今意識(自覚?)している「日本(人)」というものは、そういう人々(祖先)全体の、たゆまぬ思いと力によって、つくり上げられてきた国であるということである?!

蛇足ではあるが、現生人類は、5~6万年前に、遙か?アフリカ大陸から、世界各地に広がっていったのである?!その極東アジアでの、ある時期からの、まさにほんの一コマ(人間模様?)が、我々の日本なのでもある?!

(2) 2番目の大きな山?としての、「近畿大和王権」の全国支配と、そこにおける「(九州)倭国」との軋轢ないし並立?!

そこで、このシリーズ(「さらなる真相を求めて」)では、これ以降、その2番目の大きな山?としての、「近畿大和王権」の全国支配と、そこにおける「(九州)倭国」との軋轢ないし並立(ある意味抗争?)について、より具体的に考

えて（推察して）いきたい！

とにかく、ここでは、いわゆる「神功皇后」や「武内宿禰」、あるいは「応神」（→「仁徳」？）や「天日矛（ツヌガアラシト?!）」・「アカルヒメ（下照姫）」、さらには「仲哀」や「住吉大神」の話と、それらの関係性の解明が、最も重要な鍵？となるう?!ただし、何度も言うように、「記紀」においては、この部分が一番粉飾（嘘？）が多いので、その解明は困難を極める?!

その原因は、もちろん、この部分（時期）が、当時の「記紀」政権にとって、最も隠して（暈して？）おきたい部分であるが、その理由の一番大きな要素は、彼らが、当時の政権（王権）の正統な？継承者ではなかったということであり、そのことを知られては、その後の政権運営がうまくいかないと踏んだからである?!

とは言え、「記紀」においては、「近畿大和王権→高天原勢力」が歴史の主体・主役であり（それは、もちろん直接には吉備勢力による政権樹立ではあっても！）、九州の臭いや影？を至る所でちらつかせてはいても（それは、せめてもの誠実さの証し?!）、近畿大和（天皇家）の万世一系は揺るぎない事実とされているのである?!

例えば、第15代「応神」は、「神功皇后」と「仲哀天皇」の子とされているが、当時「熊襲征討」や「新羅征討」と呼ばれるものがあつたにせよ、彼が生まれたのは「九州（宇美?）」であり、「住吉大神」に守られて近畿・大和に入っている！しかもそこには、仲哀の先妻？の子（香坂王と忍熊王）がいて、彼らと戦ったという?!

また、その5世孫とされている第26代「継体」は、九州での「磐井の乱」（531?年）に勝利した後、「自分は、長門以東を制かとり」、部下？の物部麁鹿（火）には、「筑紫以西を制かとれ」と命じている！ただし、負けたはずの「磐井（葛子）」は、その賠償（地）として、糟屋の屯倉を献上しただけでもある?!

しかも、もともと近江・越から出て、近畿大和の大王となっているのであるから、わざわざ「自分は、長門以東を制かとり」と言う必要はないはずなのに、そう言っている（言わしめてる?!）！さらに、もっと厳密に言えば？、長門と筑紫の間には、いわゆる「豊国（豊前・豊後）」があつたのであり、その大王（支配者）であつたならば、その言質は至極当然となる?!

とにかく、九州には、近畿大和に比肩する政権（王権）が、確実に存在したとしか考えられないのである?!

(3) 九州にあつた政権（王権）とは、具体的には、どのような勢力（王統？）であつたのか?!

では、その九州にあつた政権（王権）とは、具体的には、どのような勢力（王統？）であつたのであろうか?!かの「邪馬台国」の後裔であつたのか、それと

も、その敵対国であった「狗奴国」の後裔であったのか、はたまた、その後渡来・進出してきた「外来勢力」であったのか？

その詳細な真相は、まだまだはっきりとはできないが、少なくともその後の展開からすれば（百済あるいは騎馬民族的な要素の出現、全国的な波及！）、まさしく「外来勢力」の九州渡来・進出、そして、その後の近畿・大和への移動・収奪？ということしか考えられないのである？！

最後に、私は、ここが一番のポイント（謎？）だと考えているが、その中で、多分？真相を握っているのが、（ある時期の）出雲・近江勢力（丹波・越？）の九州進出？であり、その先兵として派遣？された「神功皇后」（息長氏→息長帯姫）と「仲哀天皇」（その実は、「武内宿禰」→住吉大神？）である？！そして、その子とされている「応神」だということである？！

しかも、それは、多分？『魏志』の記載時（3世紀末）から消息を絶つ？、その後の（九州）倭国と、いわゆる5世紀の「倭の五王」の間の、まさに「ミッシング・リング」の期間なのでもある？！

これから、その謎？の解明を、改めて行っていくのであるが、予めの枠組み（事実の大枠？）としては、例えば5世紀末からの、いわゆる須恵器の、加羅系から百済系への変化？！そして、6世紀前半の河内・大和両地方を中心にした百済系集団の渡来（→群集墳）。さらには、531年？の、大和王権の九州遷都？（貴国→蘇我氏本拠地・肥前基肆国？）、その後の九州年号の存在、天智の九州年号使用等が絡まってくるであろう？！

11 「出雲？・丹波（丹後？）」の九州進出と宗像（氏）の関係?!そして、その先に見えてくるものは?!

(1) あまりにも「単純あるいは幼稚過ぎる？」マスコミの古代史報道（観）?!

先日、NHKのテレビ番組「歴史秘話ヒストリア」を見た！最近話題の、福岡県宗像市の「沖ノ島」に関わるものであったが（ユネスコの世界遺産に登録された！）、以前、民放でもやっていたので、あまり期待はしていなかったが、それなりに新たな知見や刺激は、もちろんあった?!

しかしながら、その根底にある？、相変わらずの近畿大和（朝廷）一元主義の立場?には、悲憤慷慨（怒り?）、と言うよりは、何やら諦観気味の失笑の方が先に立った?!

と言うのも、今回、ある意味最も重要であった「宗像族（氏）」や瀬戸内海（航路）の中心部に位置する（そこを牛耳っていた?）「吉備勢力」との関係や、半島諸国（とりわけ伽耶・百済地域）を含んだ、北部九州や出雲、さらには丹波・丹後、越、近江といった、間違いなく我が国古代史の鍵を握っていると思われる地域（勢力）との関係やつながりが、ほとんど考慮されていなかった?!

すなわち、近畿大和（朝廷）が、（あたかも当然のように?）すべて（単独で）交易や祭祀を行っていたかのような前提?には、いささか閉口したということであり、初めてここで口にすると、マスコミ（NHKではあるが!）の、「単純あるいは幼稚過ぎる？」番組・報道の質?を痛感したということでもある?!

異論・反論をすべて考慮しろとは言わないが、何らかの根拠や信頼性が感じられるもの（少なからずあるし、しかも、近年ではそれは増えている?!）については、それなりの配慮はあってしかるべきではないか?!近畿大和（朝廷）一元主義の立場?なら、それはそれでよいのであるが、その理由も、きちんと最初に述べておくべきである?!

何の説明もない、最初からの断定的な言質は、人々（視聴者）の理解を誤ったものにする?!それとも、そもそも、そのための努力をしていない（するつもりはない）のか?!とにかく、勉強不足?の感は否めないのである?!

いずれにしても、その頃の近畿大和（朝廷）がどのようにして成立したのか（いつ頃、どのような勢力が、どのような経緯で、どのような王権?を築いていたのか?）、そして、その「王権?」は、当時どのような状態にあったのか?

そうしたことを踏まえて（最新の研究成果も取り入れて!）、例えば番組で紹介されていた「宗像族（氏）」や朝鮮半島南西部（当地には、何故か?前方後円墳が築かれている!）とのつながり、関係を明らかにして（推察して）、それらを整合的に説明して欲しかったのである?!

もちろん、そのようになされていたのかもしれないが、少なくとも私には、ほとんどそのようには受け止められなかったということである?!その背景・原

因等については、今の私には、かなり明白とはなっているが？、一応ここでは、それはそれで置いておくことにして、以下、番組によって得られた新しい知見や考察の可能性について、改めて整理しておきたい！

まず、件の福岡県宗像市の「沖ノ島」の祭祀（跡）状況から、幾つかの重要な史実が炙り出されてくるということである！その一つが、その祭祀（跡）は、5世紀から10世紀にかけての、およそ600年間のものとされるということであり（最初期が5世紀というのは、もう少し早いのでは？と思っていたので、少し意外ではある?!だが、やはりこの島に近づくのは、とにかく危険であったということであろうか?!）、そこでは、3つの祭祀段階（様相）があるということである！

端的には、その祭祀場所（立地）の違いからであるが、最初が「巨石（岩）の上」、次が、それらの「岩陰や岩の間」、そして最後が、「平地（杜の前）」というように移り変わっているということである！

ちなみに、これは、列島内における祭祀の移り変わりと同じ様相と考えられ（多少単純過ぎる把握かも?）、その変遷のトータルな姿・形が、そこに凝縮されているとも言え、その意味で、貴重な史跡・文化財の場所ということである！

したがって、出土物のすべて?が、国の「重要文化財（一部国宝）」となっており、まさに「海の正倉院」と言われる所以ともなっているのである！なお、「女人禁制」の島としても有名である！

(2) 「沖ノ島」祭祀から見えてくる「謎の5世紀」?!まずは、それは出雲との関係から?!

しかるに、それらのことは、ほとんど無条件に理解することが出来るのであり、その歴史的価値は測りしれないものがあるであろう?!しかし、問題は（少なくとも今の私にしてみれば）、どのような勢力（氏族）が、そうした祭祀を、その場所（島）で、長い歳月に亘って（600年間!）、しかも命がけ?で行ってきたのかということである?!

もちろん、単純には、その祭祀の目的は、荒れ狂う?玄海灘での航行の安全祈願、あるいはその周辺で漁業を営む海人族の、その海（島→山?）の神?への畏敬と感謝の営みではあったろう?!

しかし、これについては、私は、そのことよりも、むしろ始まった時期、すなわち5世紀の初頭?ということと、その祭祀（大和王権が関わったもの?としての）が、10世紀で終わっているというところの双方に、別な興味が湧くのである！

何故なら、その5世紀から10世紀の間の、およそ600年間に亘る祭祀は、ある特別な意味、あるいは背景をもつ祭祀ではなかったかということであるが、裏を返せば?、その600年間以外は、その島を経由（利用?）する必要がなかったということである?!とりわけ、その祭祀の目的の一つである、ある勢力（氏

族)が、荒れ狂う?玄海灘での航行の安全祈願をしなくてもよくなったということである?!

つまり、その、それぞれの時期に、沖ノ島を含めて、周辺の勢力(氏族)の間で、何かそれまでとは異なった状況、あるいは関係が出来上がっていたのではないかということである?!

例えば、5世紀は、我が国では「謎の5世紀」、そして、その前の300年代は「空白の4世紀」とされているが、実は、「分からない?」というよりは、「全体の状況が激変した?」ということではなかったかと思われるのである?!

そこで注目されるのが、鉄(鋳)の出土である!朽ち果てた鉄(鋳)が、出土物の一つ(沢山あったが!)として紹介されていたが、この島を頼りに(経由して?)、ある勢力(氏族)が、その鉄(鋳)の輸入・配分(交易?)のために、危険を賭して往来していたということである?!

そしてまた、その島の管理?を任されていたのが、宗像大社(宗像氏→海人族の一つ?胸に彫り物?があったがために「胸形」と呼ばれた?!その習俗からすれば、「南方系」ではなかったか?)であったとすれば、彼らは、その交易に加担、あるいは直接関わっていたということになる?!

要は、その時期と、往来の発着地(目的地)がどこにあったのかということであるが、ここで思い出されるのが、出雲の大国主命と「宗像三女神」の一人(長女?)「多紀理姫^{タギリヒメ}」(天照大神と素戔嗚命との「誓約^{うけひ}」によって生まれた!)の関係である(実際、大国主命を祀る「出雲大社」には、彼女を祀る「筑紫社」があり、正妻?の「スセリ姫」より丁重に扱われているという?!しかも、彼女は、海上の安全を守る神ともされている?!)!

また、例の「出雲の国譲り」に際して、最後まで抵抗し、信州諏訪の地まで逃げ及んだ「タケミナカタ命」の、「ミナカタ→ムナカタ?」も気になるところとなる(ただし、彼の母親は、越の「ヌナカワヒメ」とされており、そこに矛盾は感じるが?)?!

いずれにしても、このような神話・伝説からしても、そこに出雲(もちろん、単純な理解では分かってはこないが?!)の関わりがあったことは間違いなく、単なる「大和王権(朝廷)一元主義」(特に、場所・位置的なこと)では、古代史の真相?は見えてこないということでもある?!

(3) 見えてくる?「大和王権」の変化と「二朝?並立」の実像?!その鍵は、「宗像族(氏)」が握っている?!

ところで、以上は、山陰・日本海(航路)との関わりであるが、一方、瀬戸内海(航路)に目を向けると、現在の広島県宮島にある厳島神社の祭神が、同じ「宗像三女神」の一人「市杵島姫^{いちきしまひめ}」(三女?)とされていることに、改めて関心をもたれる?!

これについては、番組では、吉備の、ある島（名前は失念した！）に、沖ノ島と同じような祭祀の場所があり、双方から、同じような出土物が出ているともあった！

多分、最終的には、この瀬戸内海（航路）を完全に掌握した、（まさに吉備から進出していった?!）「大和王権（朝廷）」が、ある時期から（or まで?）沖ノ島を利用していたものとも考えられる?!

ちなみに、次女?の多岐都姫タギツヒメは、そこの海人族（宗像氏?）の最前線?大島（沖ノ島と陸部の間の島）の中津宮の祭神とされているが、とにかく、この宗像族（氏）の、我が国古代史における役割というものが、実はとてつもなく大きく（そのことは、記紀神話における天照大神と素戔嗚命の「誓約」の物語で実証?されている?!）、とりわけ、その立地の場所が重要な意味をもっていたものと思われる?!

そして、同時に世界遺産に登録された、宗像大社近辺の古墳（新原・奴山古墳／5世紀後半～6世紀後半）の存在が、それを物語るものでもあろう?!

ただし、ここでは、世界遺産登録から漏れた、近くの、神功皇后所縁の「宮地嶽神社・古墳（大型円墳）」や、朝鮮半島南部（伽耶・百濟南部地域）における「前方後円墳」の存在とその意味、あるいはその後の?、番組では出て来なかったが、筑紫の「水沼（→三瀦?）みぬまの君」との関係も大いに興味があるが、今回は、これについてはこの辺で終わることとする?!

とは言え、最後に触れておきたい（言いたい）ことがある！

それは、とりもなおさず、この時期（特に、その最初期の祭祀の頃）、（九州）倭国と（紆余曲折を経た?）大和王権が、まずは並立（二朝?並立）していたが、その後、その大和王権の成立にも関わっていた「出雲?・丹波・近江」勢力の、日本海側からの九州進出（神功皇后・武内宿禰伝説?!）、そして、例の「倭の五王」の登場によって、それらの関係が変化、再編?されていったのではないか（近畿大和王権に一元化されたように見える?!→「応神の東征?」、あるいは百濟勢力の「近畿・河内進出」?!）ということである?!

しかし、その後も、「二朝?並立」の状態は残った?!ということは、再三主張してきていることではある！

そして、さらに、例の「倭の五王」の登場は、まさにその5世紀初頭であり、彼らの北部九州への渡来・侵入が、新たな力（緊張?）関係を作り上げ、そのために出雲や近畿・大和（まずは、出雲勢力?!）が、その沖ノ島・宗像族（氏）を味方にして、「沖ノ島祭祀」を行い始めたが、その後は、その「倭の五王」の後裔の近畿・大和への東遷（一時期、逆に九州に拠点を移動させていた?!）によって、少なくとも「半島との交易経路」としては、その島の役割（祭祀）は終えたということではなかったか?!

要するに、そこに、「全体の状況を激変させた?」、関係勢力(氏族)の和合や移動があったのではないかということである?!

最後に、通説に言う、当時既に、東北地方を除く「列島全体に王権を敷いていた大和朝廷」があったとすれば、しかも、その5世紀の「倭の五王」が、その「列島全体に王権を敷いていた大和朝廷」そのものであれば、何も突然?(距離的には近くはなるが!)、あのような過酷な海上交通を選ぶ必要はない?!

つまり、今までのように?、玄海灘沿岸部(対馬・壱岐・末盧・伊都・那の港等)を活用すればよいのである?!だが、そこは、逆に危険な場所?で、そこと、最初は無関係であった別の勢力(出雲→近畿大和王権?)が、新たな?経路・寄港地を確保しなければならなかったということである?!

12 とにかく、「応神」の特定化が急がれる?!ただし、「継体」は、ほぼ目星が付いている?!

(1) 渡来系倭人?の建国プロセスが、我が国古代史の骨格?!江南／伽耶・新羅／扶余・百済の三層波状構造?!

以上、これまでの考察?からも分かるように、我が国の古代史は、弥生時代中期(紀元前2世紀頃?)を境にして、渡来系倭人の進出・建国のプロセス?を追うという形で、その輪郭が得られるという受け止め方をしてきているのであるが、「やはりそれは、間違っていない!」という感触を、改めて強く持ち始めている昨今でもある!

もちろん、それは、事実であったろうからではあるが、基本的には「記紀」の魂胆?、すなわち、そこに嵌め込まれている作為(の構図?)が、その事実を、そこかしこで指し示しているということである?!

具体的には、まずは、北部九州(奴国等)や出雲地方に渡来・居住していた、いわゆる中国江南地方(揚子江下流域)からの倭人・海人族(越・呉?→安曇族)の進出(この中には、かの有名な「徐福渡来(伝説)」も入る?!)。

彼らは、その後、海人族の特性を生かして船を駆使し、全国各地に入植し、稲作を広め、有力な環濠集落を形成した(→佐賀県吉野ヶ里遺跡/奈良県唐古・鍵遺跡/愛知県朝日遺跡等)?!

その次が、同じ渡来系倭人ではあるが、朝鮮半島の南端・伽耶(加羅)地方からの渡来・進出。彼らは、最初は、北部九州(伊都地域→平原遺跡等?)に進出したが(当地に、「可也山^{かやさん}」という名の山もある!)、例の「倭国大乱?」(2世紀末)の中で吉備に移動(進出?)し(ひょっとしたら首謀者?)、そこを拠点にして(楯築遺跡?)、その後出雲・丹波(→越?)、そして河内・近江を経由して、最終的には近畿大和(纏向)で、最初の王権を樹立した(三輪王朝→初期大和王権?)?!

最後が、同じ半島系倭人ではあるが、北方騎馬民族系(扶余)との混血・交流の中で発展してきた、同じ朝鮮半島南西部の倭人(百済勢力)である?!

彼らは、4世紀後半頃に、最初は、北部九州の一角(貴国→基肆国?)に渡来し、そこで、この地に兵站基地?を置いていた、初期大和王権の出雲・丹波系(神功皇后・武内宿禰系?)と接触・和合?し、その後、彼らの勢力を抱き込んで(宇佐を拠点にして?)、瀬戸内海から河内に進出し、大和(初期大和王権)も含めて、近畿一帯に強大な王権を築いた(→河内王朝?)?!

そして、その後、その王権は、九州で遺続していた(本宗家である?)倭国皇統(九州王朝?)との共存・軋轢等を繰り返しながら、最終的には、8世紀の初頭、(統一?)日本国(←倭国)の樹立?を、大和において為した?!

ちなみに、それ以降の歴史は、基本的には、既に我々の知るところであるこ

とは言うまでもない（もちろん大まかではあるが!）?!

しかるに、ここが重要であるが、これらの動き（流れ）は、「記紀」においては、端的に（実際は、そんな単純に示されてはいないが!）、最初のストーリー（展開）が、（南方→）南九州から来た「神武」（時代）に（ただし、本音は出雲・大国主命にあった?!）、次のストーリー（展開）が、（伽耶→九州→）吉備から進出して来た「崇神」（時代）に、そして最後のストーリー（展開）が、（百済→）九州から進出して来た「応神」（時代）に、それぞれ相当する（させられている?）のではないかということである?!

別言すれば、集められた個々の情報（事実や伝承等）を、もちろん造作（捏造等）も加えて、上記3つのストーリー（展開）に当て嵌めて（散りばめて?）いったということである?!

その意味で、「記紀」は、歴史書というよりは、創作歴史（作品）ということになるのかもしれない?!

ただし、もちろん、以上のような考察（類推）は、編纂者達の思惑で書き上げられた「記紀」、及び他の多種多様な文献史料の解説（整合性の突き合わせ等を含む!）と、それに対応させられた考古学的発見（物）の考証という、双方の手続き（多くの人の労苦!）の成果（賜物?）ということではあるが、それでもなお、それらは、「永遠の仮説（体系）?」ではある?!

何故なら、それらは、（我々、厳密には私?が目撃した）事実、それ自体ではないからである（歴史の解釈とは、本来そういうものでもある?!）!

しかも（したがって?）、例えそうしたことを前提としていたとしても、珍説・奇論はともかく、それらに関わる、数々の異説・異論（それなりの根拠や信頼性がある?!）も、一方ではあるのである?!

まさしく、解明の実態（実体?）は、嫌と言う程錯綜?しているのでもある?!

(2) 「記紀」は、「応神（百済勢力）」を基点にして描かれている!改めて、それは何故か?!

とは言え、言うなれば、その錯綜?（状態）が、どうにか解_ほどけていかないものかと、甚だ失礼・不遜!にも立ち向かっているのが、この私なのでもあるが、その新たな突破口?が、上記3つのストーリー（展開）の構図から、徐々に切り開かれてくるようにも思われるのである?!

すなわち、それが、「応神」（そして、「継体」!）の人物特定化?ということであるが、要は、我が国の古代史は、中国江南、次に伽耶（・新羅）、最後に（扶余・）百済の勢力（氏族群）の渡来・進出、その波状的三層勢力（構造?）によって形作られたということ、そして、その最後の百済勢力（氏族群）の渡来・進出が、「応神」（時代、そしてそれ以降）という形でまとめられているということである!

換言すれば、「記紀」は、応神（時代、そしてそれ以降）を基点にして、描かれているということであるが、問題は、そうしたストーリー（展開）が、いつ、誰によってまとめられ（構想され？）たのかである！ただし、これについては、これまで述べてきた通りではある！

繰り返しになるが、以前私は、「『記紀』の叙述は、（藤原不比等を黒幕とした記紀編纂者達?!の直系の先祖？である）応神（百済勢力）を基点としている?!」ということ述べたが、もちろんそれは、最後に渡来・進出、そして実権を掌握した（→故に、歴史を書き残せた?!）「応神（百済勢力）」（記紀編纂者達）が、当時の自らの依って立つところではあったので、それはそれで、当然（必然?）であったわけである?!

また、その「記紀」の編纂方針、あるいはそのモチーフについても、以前具体的に紹介したことがあるので（前シリーズ「古代史の旅」⑩等）、それ自体は繰り返さないが、改めてここで確認しておきたいことは、何（どこ）を基点にして、天照大神から始まる「万世一系の皇統譜」を創出しようとしたのかということである（これが、記紀編纂の最大のモチーフでもある?!）！

実は、その答えが、まさしく「応神」（の時代、そしてそれ以降）だということである?!

ここで、改めてその根拠を列記（再記）すると、以下のようなものである！

- ・この「応神」（の時代、そしてそれ以降）が、「記紀」においては、最も捏造や暈しを加えられている→だから、逆に怪しい→そこに、大きな秘密が隠されている?!→どんな秘密か?→応神や神功皇后（卑弥呼・台与と結びつけられた?!）が、正統・正当な（輝かしい事績を残している!）先祖であったが、後の政権（藤原氏）は、そのことを直接示す（誇る?）ことができなかつた?!→何かやましいところがあった?!→裏切り・乗っ取りがあった?!（←関裕二氏）
- ・「神」（実は「鬼」?!←崇る存在←正当な扱いを受けていない!恨みを有して死んでいった?!）（←関裕二氏）という名の関係性（神武・崇神・（神功）・応神）が、そのことを暗示している（→それらの漢風諡号は、後から賦与されたものであり、何らかの物語性?が込められている!）→それは、一体何を意味するか?!→単純並置ではなく、他（前）の3つの「神」から「応神」（という名前）が形成?されている?!→だが、そこから、現皇統譜の「継体」、「欽明」等が生じてはいる!→とにかく、「継体」、「欽明」等へと流れる現皇統譜は、「応神」（の時代、そしてそれ以降）から始まったということを示す必要があった?!（←それが事実であったから?!）
- ・応神と神功皇后の関係→母親とされている「神功皇后=息長帯比売」は、一方で『魏志』に載っている、邪馬台国の女王卑弥呼や台与に仮構?されてい

るが（実際より、120年繰り上げられている→その意味で、「神功皇后」自体は非実在?!）、夫である「仲哀」よりも、蘇我氏・葛城氏等の祖とされている「武内宿禰」や、奇妙に彼らに纏わりつく? 「住吉大神」との関係が力説されている（武内宿禰=住吉大神?）? →なお、彼女の父親は開化天皇の玄孫・息長宿禰王（「息長氏」）で、母親は天日矛（新羅からの渡来者!）の裔・葛城高額媛とされている。

- ・ 応神と宇佐神宮（宇佐八幡）の関係→後の大和王権の実質的な祖とされていた?!（←宇佐八幡託宣事件）

(3) 「応神」が特定出来れば、懸案の「古代史解明」は飛躍的に進展?!現時点では悔しい?二つの研究成果?!

他にも、縷々あるが、我が国の「古代史解明」は、「記紀」が、一方で暈しながらも、一方で最も気を使っている? 「応神」の正体と、その活躍の時期を特定出来れば、飛躍的に進展することは間違いない?!

そこで、改めて、その「応神」の正体であるが、現在私は、二つ（二人?）の説の狭間で、その特定を躊躇している?!

その一つが、何回も出していると思うが、兼川晋氏のもので（『百済の王統と日本の古代 <半島>と<列島>の相互越境史』2009年、不知火書房）、当時（4世紀末）高句麗に攻め込まれていた百済（「残国」）の王族（本宗家沸流系）の兄王（藤とう→高良大社の高良玉垂命?）が「応神」で、彼は、九州の「貴（木・基肆?）国」に渡来し、その後、彼の王統?が、『宋書』に載っている、讚・珍（・旨）・済・興・武（倭の五王）へと続くとされるものである!

ちなみに、兼川氏は、「旨」（隅田八幡鏡に見える!）は、仇台系百済の「昆支こんき」（百済王「余慶」の子/継体とされる「軍君こにきし・男弟王」の実の兄!）のことであると、彼（旨）は、途中で百済へ戻ったとされる（百済文献にも、そう記されているという!）?!

もう一つは、これも、以前紹介した石渡信一郎氏（→林順治氏→仲島岳氏『古代天皇家と「日本書紀」1300年の秘密 応神天皇と「日十大王」の隠された正体』2017年、WAVE出版）の説で、百済から渡来した（正確には、倭王家へ入婿?）「昆支」が、その「応神」とされるものである!

そこでは、いわゆる河内王朝?を象徴する「古市古墳群」と「百舌鳥古墳群」の、それぞれの主墳? 「誉田御廟山古墳（伝応神天皇陵）」と「大仙古墳（伝仁徳天皇陵）」が、築造時期、形式等の関連で、「昆支=応神」と「軍君（男弟王）=継体」の兄弟のものではないかとされ、「大仙古墳（伝仁徳天皇陵）」は、実は「継体天皇陵」ではないかとされているものである!

「大仙古墳（伝仁徳天皇陵）」が「継体天皇陵」ではないのかという説は、通説を大きく覆すものであるが、その説明を見ると、その蓋然性は高いようにも

思われるのである?!

詳しい説明は、これ以上は、ここではできないが、このように、二つ(二人?)の説は共に、「応神」が百済王族であることは一致しているのであるが、残念ながら?、その細かいところが食い違っている!

しかも、もう一人の重要人物である「軍君」も、九州にいた(とされる)「継体」(第一継体?)なのか、それとも近江・越から出た(とされる)「継体」(第二継体?←彦太尊)なのか(兼川晋氏)、そこも、両者の間ではくい違っている?!

とは言え、「継体」の人物特定、それ自体は出来ているのであり(二人の説は一致している!）、そこから、「昆支」=応神、「軍君」=継体で、「昆支」と「軍君」が兄弟ということになれば、謎は簡単に解けるということにもなる?!

その意味で、改めて鍵を握るのは、百済王子「昆支」(もちろん、「軍君」も!)なのであるが、とにかく私は、「応神」、そしてまた「継体」(以降の天皇)は、すべて百済系の人物だと想定しているので(そうとしか考えられない!）、現時点では、誠に悔しい?二つの説のズレということなのではある?!

いずれにしても、「応神」が、本宗家(沸流系)百済王族の「兄王」(藤→高良大明神?)なのか、それとも仇台系百済王族の「昆支」なのか、その特定がなされれば、大いなる進展が見込めること必定であると思う次第である?!

13 百済の「檀魯制」から見た、九州（筑紫）王朝と近畿（河内）王朝の関係熟考?!

(1) 九州（筑紫）王朝と近畿（河内）王朝の並立?!その視点でしか説明できない「応神」以降の歴史?!

先号(12)で述べたように、急がれる「応神」や「継体」の人物特定化ではあるが、残念ながら、まだまだそこまでは至っていない(ただし、「継体」については、ほぼ目星はついている?!→仇台系百済牟氏・軍君/男弟王→男大迹^{おおと}王?!)!

とは言え、彼らが活躍?した「空白の4世紀」「謎の5世紀」において、百済からの渡来・進出者(百済王族)が、当時の「九州(筑紫+豊国?)倭国」を牛耳り?、宇佐(国)を橋頭堡にして?、その後近畿・大和に移動?!後裔である「欽明」達(「上宮王家」を含む)が、それ以降の皇統・近畿(河内・大和)倭国を形成していった?!

おそらく、そのことは、ほぼ間違いないであろう(百済との関係、百済の情報、百済色の蔓延?は、そのことを如実に示している!)?!

したがって、そうであるならば、改めて、そこに展開された一連の史実?は、可能性としては、彼らの祖国?百済本国をも巻き込んでの、まさに「百済式檀魯^{たんろ}国家」間の関係の推移、そして、諍^{いさかい}、主導権争いの過程であったと言えるのかもしれない(その代表的なものが、「磐井の乱」「白村江の戦い」「壬申の乱」等?)?!

なお、「百済式檀魯制(→分国主義?)」とは、以前にも紹介したように(前シリーズ「古代史の旅 35」等)、当時の百済の独特な統治形態とされるもので、進出・獲得した領土(「檀魯」)に血族(王族)を送り込み(その地の王とする!)、その国を分国化?するものであった!

そして、そうした檀魯国家?間の王族の移動は(表面的には「人質」のような形式ではあっても?)、百済族全体の王権(王統)の継続と安定を保障するものであった?!

しかし、もちろんそれらは、最後には、近畿大和王権(倭国分国→日本国)に一元化されるわけではあるが(結果的にそうなった?!)、いずれにしても、ある時期(「応神」とされる人物の進出時期?!)から、いわゆる「倭国」自体も、その檀魯国家の一つとなり、その後、百済本国が滅びた660年以降は、(事実上本家筋?となった)九州倭国(王朝)と、そのまた檀魯国家としての近畿大和(王朝)が並立したということである?!

その意味では、それぞれに、共有する(共通の?)歴史や要素(情報)が持ち込まれていることは当然であり、そのことを、単純な「二者択一」で選択、論争することは(気持ちは分かるし、そもそも分かり易いかもかもしれないが)、絶対

に？真実を見誤ることにもなる？！

ただし、改めて「記紀」においては、そうした百済系の「檀魯国家間」の関係や諍い、主導権争いを隠蔽し、しかも、最後に残った？近畿大和王権の方からのみ（そちらの立場から）、全体の史実？を語っているわけであるので、なかなかその真相は見破られないようにはなっている？！

それ故に、もし、上記のことが本当であるのならば、我々は、そうした視点（立場）を逆手？に取って、冷静に双方の動きや関係を見ていけばよいだけの話しとなる？！

単純なことではあるが、一方の視点（言い分）だけで見ると、見えるものも見えない、あるいは結果が、まるで違うもの（正反対！）になったりすることがあるということでもある？！

要するに、我々は、卑弥呼・邪馬台国論争と同じように（文脈・テーマ自体は違うが！）、それ以降の「倭国王権」が九州にあった、否、近畿大和にあったという、まさに二者択一的な史実解明？を行ってきているのであるが（もちろん、そういうことを視野に入れていない人も、多々いるようではあるが？）、両者は共に、ある時期から同じ百済王族によって営まれてきた「檀魯国家」であり、その意味で、両者の歴史（認識）は重なっており、始祖の伝承や事績は共有されていたのではないかということである？！

(2) 双方が、「倭国（皇統）」を名乗っていたということであれば、それは、百済の「檀魯」関係しかない？！

したがって、もし、そうでなければ、その時期の「記紀」の内容は、当時の編纂者達にとっては、直接は無関係な、しかし、何らかの意図をもたせた（少なくとも、一連の物語にはする必要はあった？！）、だが、全体としては、断片的な史実？（情報）を繋ぎ合わせた「寄木細工（物語）」か、まったくの創作物（物語）である？！

しかし、流石に？、そんなことはありそうもない？！以前にも述べたが、まったくの「無」（空想？）からは、あのようなストーリー（物語）は紡ぎだせない？！否、却って「逆効果」となるかもしれない（滅びた国の末裔？が、別の国の王権を担っている？！したがって、ある意味、それは、「篡奪？国家」ということにもなる？！）！

つまり、「記紀」は、近畿大和王権の正統性・正当性に立脚したストーリー（物語）を構築はしたが、まったくの創作（捏造）ではなく、あくまでも近畿大和王権から見た、真実の？歴史の叙述を行っているということである？！

ならば、ここでは、その時期のストーリー（動き）を、改めてそうした視点から見る必要性が出て来るとともに、そうすることによって、これまで見えていなかった部分（これまでの分析・解釈、そして共有認識が停滞していた部分）が、

新たに見えてくるのではないかということ、確認（主張）する必要が出てくる?!

特に、ここで問題としている「応神（時代）」から「継体（時代）」、そして、「欽明（時代）」から「敏達（時代）」へと変遷していくプロセスは、まさしくそれによって、正しく認識できるであろうということである?!

例えば、その最も卑近な例が、周知の? 「磐井の乱」であり、勝者とされた（正統とされた!）「継体」や「物部麁鹿火」の立場、あるいはその言動の意味である（前にも述べたことではあるが、これについては、多くの人が、その奇妙さ・不思議さを指摘している?!）!

さらには、かの有名な、「倭の五王」の最後の「武」の、宋の皇帝への「上奏文」（ただし、その文面は、別の百済関係史料とよく似ているという言説を、どこかで見たこともあるが）からも分かるように、（九州にいた?）「倭の五王」達は、当時の東日本（常陸）から西日本全体、そして朝鮮半島南部へと、その版図を広げていっていた（「檀魯」を至る所に設置していた?!）ということでもある?!

ひょっとしたら、その象徴（証拠?）の一つが、例の「前方後円墳」の、朝鮮半島南部を含めた、全国的・広範囲な普及・展開だったのではないかとも思われる?!

こうした中で、九州（王朝）と近畿大和（王朝）の双方が、それぞれ「倭国（皇統）」を名乗っていたということであれば、もちろん、その関係（プロセスや関係する人物等を含む）を詳しく（正しく?）精査しなければならないが、その視点は、百済の「檀魯」関係しかないのではないか、あるいはその関係で、これまでの分析結果や情報が、ある意味無理なく説明できるのではないかということである?!

なお、私は、ここが一番のポイント（謎?）だと考えているが、その中で、多分? 真相を握っているのが、（ある時期の）出雲・近江勢力（丹波・越?）の九州進出? であり、その先兵として派遣? された「神功皇后」（息長氏→息長帯比売）と「仲哀天皇」（その実は、「武内宿禰」→住吉大神?）、そして、その子とされている「応神」との関係だということである?!

しかも、それは、多分? 『魏志』の記載時（3世紀末）から消息を絶つ?、その後の（九州）倭国と、いわゆる5世紀の「倭の五王」の間の、まさに「ミッシング・リング」の期間なのでもある?!

(3) 改めて、列島に創り上げられた「檀魯国家?」は、当時どのように存在していたのか?!

ということで、今、改めて私は、いわゆる「応神（期）」、そして、それ以降の我が国の歴史（8世紀初頭までの）は、半島西部から渡来・進出してきた「百済（王族）」系勢力によって創り? 上げられたものではないかということ、

真剣に考え始めているのであるが、その真相は、改めて、次のようであったと
考えている?!

まず、紀元前 18 年に興った、北方扶余系百濟（王族）には三つの系統があり、本来の本宗家である沸流系（余氏）は、475 年に、その同族？高句麗に攻められ、（沸流系）百濟としては、ここで一旦滅亡したが、その直前に、嫡子「兄王（滕）」（応神のモデル？。高良大社玉垂命？→武内宿禰に投影されている?!）が、母系でつながる？倭国・筑紫に渡来（進出）した?!

そこで、新興の貴（木・基肆）国に入り込み、後に「応神？」として、天日矛・息長氏につながる（と仄めかされている？）神功皇后・武内宿禰と共に？、近畿河内に移動していった（→河内王朝）?!ある意味、それらの勢力は、百濟本宗家・沸流系（余氏）の末裔と言える?!

一方、百濟本国で実質的な宗家（本家）であった温祚系（余氏）は、最初の百濟滅亡の時（475 年）、南に逃れ（→熊津）、最終的には「白村江の戦い」で滅んだ!

その間、その血統を有する、倭五王の 3 番目の「済」が九州（筑紫）に呼び出され？、筑紫王朝（太宰府？）を継承し、爾来筑紫（九州）王朝が、その温祚系（余氏）の筆頭家？となった?! かの「磐井の乱」で有名な、「武」かもしれない? 「磐井」は、その当主であった?!

もう一つが、仇台系（余→牟氏）で、いつの頃か、本宗家沸流系（余氏）から分かれて、遼東・遼西等に檐魯を広げていたが、温祚系（余氏）や沸流系（余氏）との関係・交流の中で、その血族を双方に送り込み（「人質」として?）、実質的に（実際は「仇台系」?）、その血統である武寧王（斯摩）が、本国百濟・温祚系（余氏）を束ねたが、結局は、「白村江の戦い」で滅んだ（→事実上の「百濟」の消滅!）。

しかし、上で述べた倭五王の「済」の時、同じように「倭国」に送り込まれていた、仇台系（余→牟氏）の「男弟王・軍君→継体？」（及び兄の「昆支」?）は、倭国王（この場合は、豊国倭国王?!）となり（←磐井の乱）、その後、彼（ら?）は近畿（河内）に移動し、いわゆる「河内王朝」を樹立し、その後彼らの末裔達は、倭国全体を手中に収めた（→誉田山古墳・大仙古墳）!

ちなみに、倭国皇統は九州に残っていたが、「白村江の戦い」（の敗戦）を機に、温祚系（余氏）の天智（筑紫倭国皇統の一人!）が近畿（近江）に遷都し、倭国皇統は、事実上近畿に移った（→日本国）。

その後、先に近畿に移動していた倭国王・継体?（←豊国倭国王）の皇統は天武に移ったが（←壬申の乱）、彼の死後、持統・藤原不比等等によって、父方の温祚系（余氏）の倭国皇統に変わり（戻り?）、改めて「倭国から日本国へ」の建国?となった（天照大神を始祖とする万世一系化）。

とにかく、このように見てくると、我が国の歴史（古代のある時期から）は、百済王族の倭国渡来・進出、そして事実上の倭国参画（篡奪？）→日本国建国という形で、創り上げられたものであるとも言えるのである？！

しかし、繰り返すように、それは、我が国（倭国→日本国）が、（純粹に）他国である百済に、決して乗っ取られたものではなく、様々な状況、出自、関係をもって、列島に集散離合してきた「倭人（弥生人？）」達が、先住の「縄文人」達（これだとして、決して一様ではない！）と、ある意味渾然一体となって創り上げてきたものであることは、明白な事実である！

そして、それが、まさに実際に起きたことであり、現実の日本の姿なのでもある?!それ故に、決して、偏狭なナショナリズムで、そのことを総括してはならないのである！

人々の移動が、それ自体はかなりの困難はあったであろうが、今のような国境もなく、自由に出来た時代にあっては、まさにそれが自然なのであり、（現在の）それぞれの関係諸国が、そのことをどのように受け止めようとも、史実は史実として素直に受け止めなければならない！

よく、「関係が深かった」「交流が盛んであった」、あるいは「大きな影響を受けた」とかといった言い様がなされるが、（本当は?!）上述のようなことも、確かな事実！として、我々は受け止める必要があるのである！

14 全国に散らばる「賀茂（族）」の名?! 一体、何故か?! そして、彼らは何者なのか?!

(1) 大和葛城に蝟集? する「賀茂（加茂・鴨・…）族」の全国展開?! 彼らは、初発の王族? か?!

ところで、現在、新たに解釈に困っていることがある?! それは、いわゆる江南系倭人・海人族と見なされる?! 「賀茂（加茂・鴨・…）族」のことである!

例の「神武東征」の折、紀伊熊野の山中で路頭に迷っていた神武一行を先導し、無事大和（橿原?）まで送り届けたとされる、「八咫鳥やたがらす」こと「(カモ) タケツヌミ命」（南九州からの先住部族? → 神武のモデル?!）、そして、その「(カモ) タケツヌミ命」の裔とされる、京都「上賀茂」「下鴨」両神社の「賀茂族（氏）」…。

だが、一方で、その「(カモ) タケツヌミ命」（勢力）も一時期? 滞在し、その後、そこから、岡田→乙訓を経て、現在の山城（愛宕）まで移動（逃避?）してきたことも分かっている、大和葛城の地（現在の御所市辺り）には、その「賀茂（加茂・鴨・…）族」の広範な痕跡があり（代表的なものが「賀茂4社」→ 高鴨神社、中鴨神社、下鴨神社、長柄神社）、要するに、（ある時期の）葛城は、まさに「賀茂（加茂・鴨・…）族」の一大蝟集地? であったということである?!

ちなみに、京都（山城）の「上賀茂」「下鴨」両神社の祭神は、前者が「賀茂別雷神」、後者が「建角身命」・「玉依姫」（前者は、後者二人の孫・子神?!）、そして大和（葛城）の「高鴨神社」の祭神は「味鋤高彦根命・下照姫命・天稚彦命」、「中鴨（正式名称：葛木坐御歳）神社」の祭神は「御歳神／相殿：大年神・高照姫命」、「下鴨（正式名称：鴨都波）神社」の祭神は「積羽八重事代主神・下照比売命」、そして「長柄神社（別名：姫の宮）」の祭神は「下照姫命」となっている。

余談ではあるが、後者（葛城）の神社群は、当地で綺麗な? 平行四辺形をなしているということで、それらは最初から、そうように計画配置されたのではないとも言われている?! まさに、葛城は、「賀茂（加茂・鴨・…）族」の群居するところであったのである?!

いずれにしても、大局的に見ると、京都（山城）の賀茂族（氏）は、南方系の? 「(カモ) タケツヌミ命」（勢力）の後裔、後者の葛城の賀茂族（氏）は、いわゆる「出雲系」とも言える?! もし、そうだとしたら、一体、この両者の関係をどのように見ればよいのかである?!

「記紀」によれば、初期大和王権? は、九州日向からの神武天皇（磐余彦）と大和の出雲族（大物主→事代主系?）の婚姻関係によって成立したように示されているが、多分これが、両者の関係を明示するものであることは言うまでもないことであろう?!

その意味では、賀茂族（氏）は、出雲族と融合？した、大和での初発の王族と言えなくもないのである?!今に残る、「上賀茂」「下鴨」両神社による「葵祭」は、まさにそのことを示すものでもあろう?!そして、これが、まさに、一部で言われる「葛城王朝」（の名残?）というものでもあろう?!

とまあ、この辺までは良いのであるが、例えば、別名（尊称!）「迦毛大御神かものおおみかみ」とも呼ばれる「味鋤高彦根命」（味鋤とは、「アジスキ」のことであり、アジは、鴨の古語、スキは主基で、頭領のこと?!つまり、賀茂族の頭領という意味とも捉えられる?!）は、出雲の大国主命の子の一人で（母親は「宗像三女神」の一人「タギリヒメ」）、その同母妹が「下照比売命」である?!

これもまた、それはそれでよいのであるが、実は、もう一人の「（積羽八重）事代主神」も、同じ出雲の大国主命の子とされるのである（いわゆる「恵比寿様」!母親は「神楯屋姫」とされるが、その系統自体は不明である?!）?!

(2) 改めて、「賀茂（加茂・鴨）族（氏）」とは、一体何者なのか?!そして、どこから来たのか?!

端的に、こちらは、両者とも、いわゆる「出雲系」?の賀茂（族）なのではあるが、その関係は、具体的にはどうなっているのでしょうか（出雲系には、2系統があるということ?!）?!

そしてまた、この葛城に蝟集している「出雲系賀茂族（氏）」と、京都山城に移って行った「タケツヌミ系（南部九州系?）賀茂族（氏）」の関係は、これまた、どういう関係になっているのでしょうか?!

しかるに、前者については、例の「出雲の国譲り」事件の際、大国主命（大己貴おおなむち神）が、譲るべきかどうかの最終決断を委ねたのが、「（積羽八重）事代主神」とされているが（彼の判断に任せれば万事うまくいくというようなことを、確か、大国主命が発していた?!）、彼は、（奇妙にも?）その時、出雲の地（美保関）で幽界に消えていた（船底に沈んだ?）はずなのである（→その美保関には「美保神社」があり、「三穂津姫命」と並んで?、彼は、そこの祭神となっている!）?!

そんな彼が、何故、大和葛城の地で（も?）祀られているのか?!そしてまた、何故、その「事代主命」の後裔（娘）達が、神武（磐余彦）勢力?と婚姻関係を結び、その後の皇統の祖となっているのであろうか（「欠史八代」とされてはいるが!）?!

さらにはまた、その「（積羽八重）事代主神」と、大和（葛城）の賀茂族の頭領?「味鋤高彦根命（迦毛大御神）」との関係については、「記紀」によれば、「高天原」から出雲の国譲りの先兵?として派遣され、「味鋤高彦根命」の妹「下照姫命」の婿となっていた「天稚あめわか彦」の葬儀（裏切りの咎?で、高天原に殺された!）の時に、「天稚彦」の両親に、彼が、「天稚彦」とそっくりだ（彼は生きています?）と言われて、憤慨し、その喪屋を斬り壊したという逸話

が記されているが（今となつては、ここの部分が、実に怪しいのであるが？→何か
が暗示されている?!）、その出雲（族）の間に、どのような関係がある（潜んで
いる？）のか！この辺りも、誠に理解に苦しむところなのである？！

とにかく、以上のように、「出雲（族）」と「賀茂（族）」は、まさしく「大
和（葛城）」で交錯している（姻戚関係をもつ？）のであるが、この交錯（姻戚
関係をもつ？）状態をどのように解釈（説明）すればよいのか？！

もちろん、ある時期に（弥生時代中期以降？）、どちらも、その地に移動（入
植？）してきたことは明らかなのであろうが（それ以前の、人々のまとまった生
活痕跡は、「唐古・鍵遺跡」以外には、大和にはないとされる?!なお、「唐古・鍵遺跡」
は、当時の、いわゆる「（安曇族の？）巨大環濠集落」の一つで、吉備から近江に移
動・集結した？手焙形土器・前方後方墳勢力の全国展開によって滅ぼされたものとさ
れている！→これが、いわゆる「倭国大乱」と呼ばれるものでもあった?!）、より本
質的な（重要な!）問題は、その賀茂（族）が、どこから、どのようにして、
大和葛城の地に移動（入植）してきていたのかである？！

ただし、この場合、一方の「出雲（族）」についても、同じような疑問が出る
が、彼らの出立地（本拠地）は、やはり名前からしても、「出雲」の地では
あろう?!だが、この賀茂（族）の出立地の解明困難さは、一方の「出雲（族）」
の比ではない？！

と言うのも、改めて、この「賀茂（族）」の名は、まさに全国に散らばって
おり（もちろん出雲の地にもある！→「賀茂岩倉」遺跡等！そして、福岡県等にも!）、
その関係、あるいは移動（入植）の前後関係は、今のところまったく分からない
のである？！

しかしながら、それらの地が、まさに「賀茂（族）」と何らかの関係があつ
たことだけは、疑い得ない事実なのである？！

(3) 「海人族ネットワーク」の介在?!そこにある「海神^{わたつみ}（南方系）」と「山 祇^{やまつみ}（伽耶系）」の相克?!

さてさて、実は私が、さらに（本当に?）困惑?しているのは、その「賀茂」
の地（名）が、大和纏向に三輪王朝?を樹立した吉備勢力（前方後円墳勢力と前
方後方墳勢力の糾合勢力?!→崇神?!）の出立地、すなわち「備前児島」にも、嚴
然と存在するということである！

ある時期、近畿大和（葛城）で、出雲（族）と逢着・融合した?「賀茂（族）」
が、その出雲を倒した?吉備勢力の出身地、あるいは最近接地（←賀茂遺跡・
賀茂西遺跡?）に居住していたとは、一体どういうことなのであろうか?!ひょ
っとしたら、ここの勢力が（も?）、近畿・大和等に進出し、その後全国展開
したということも、可能性としては十分考えられるのではないだろうか?!

ただし、その逆?も、あるのかもしれない?!例えば、ほとんどが西から東へ

と移っていった当時の倭人勢力・文物（弥生系倭人の移動・進出?）が、ある時期（3世紀前半?）、東（近畿・東海?）から西へと逆流?する事実があるというが（これが、おそらく、神武の、大和での長子・神八井耳命の後裔とされる多（太）氏、そしてまた九州の肥（火）君、大分君、阿蘇君、筑紫宮家（三宅連）等の、西（九州）への移動・進出を示している?!）、実は、これだったのかもしれない?!

あるいはまた、藤井耕一郎氏が明らかにしている、吉備から移動・進出し（出雲経由で?）、近畿（近江）に集結した、いわゆる「手焙形土器・前方後方墳勢力（龍王勢力?→和珥勢力）」の、その後の、東西に亘る「環濠集落勢力」への襲撃（吉野ヶ里遺跡等）の足跡を示すものなのかもしれない?!その途上で、吉備にも、「賀茂（族）」が侵入してきたのではないかということである?!

だが、今のところ、考古学的には、やはり吉備の賀茂（族）の方が先行していたことは間違いないようである?!そうだとすれば、ここでは、これらの錯綜（矛盾?）を、どのように受け止める（解釈する?）のかということが、改めて大きな課題となってくる?!

したがって、一方で、この「賀茂（加茂・鴨）族」の出自については、当然?同じ江南系の海人族・安曇族との関係が問われることになる?!

何故なら、早くから海人族（航海民）としての安曇族が、（北部）九州を拠点にして、山陰、近畿や東海、さらには信州等に入植していたことは明らかであるが（→安曇や安積・渥美等の名）、彼ら海の民が、瀬戸内海、そして太平洋沿岸部の方にも、まさしく「海人族ネットワーク」を創り上げ、交易を中心とした古代の倭人国家を形成していたことは、ほぼ間違いないことであろうからである（→倭奴国・伊都国等）?!

具体的には、まずは、（北部）九州（奴国等）に渡来・居住していた（この中には、かの有名な「徐福渡来（伝説）」も入る?!）、いわゆる中国江南地方（揚子江下流域）からの倭人・海人族（越・呉?→安曇族。57年の「漢倭奴国王」?）が「（九州）倭国」として最初にまとまった（「倭国王」の出現→107年の帥升王?）。

その後、彼らは、各地に、その版図を広げ、大きな構図としては、出雲（実は吉備勢力との糾合?!）による西日本の制覇（葦原中つ国→スサノオや大国主の治績として投影されている?!→倭国大乱?!）があり、その後、吉備・出雲勢力の一部（手焙形土器・前方後方墳勢力）の近畿からの進出（逆移動?）による、卑弥呼共立による「邪馬台国（→九州倭国）」の出現（親魏倭王 239年）があり、王権的には、（北部）九州と近畿・大和の二極構造を創り上げていった?!

こうした状況は、各勢力・部族が形成していた「海人族ネットワーク」の介在の中で、稲作や養蚕、鉱物資源（黒曜石、褐鉄鉱、辰砂、ベンガラ、ヒスイ等）、木材、青銅器・鉄器（材）の取得・供給・分配等の問題によって、吉備、そして近畿・東海等の諸勢力の結集と九州・出雲勢力の蹴落とし（国譲り→大和纏

向の形成)、そして、それに関わる半島倭人勢力(伽耶・新羅・百済→崇神勢力→穗積・物部氏等)の移動と進出が併せ行われていった?!

吉備は、まさにそれらの集積・結節地であったということでもある?!だが、まだまだこの理解(仮説)は、十分ではない?!何故なら、その全体像及びその順序性が、時間的な推移の中で、十分整合的に説明(解明)され得ないからである?!

とは言え、我が国の統一国家的進展?が、倭人・海人族(航海民)によって主導され、彼らのネットワークとそのバランスのあり方が、その時々の実相を現出してきたことは、多分間違いないであろう?!

15 海人族（南方系倭人→安曇族）の全国ネットワーク?!まずは、そこから始まった?!

(1) 三つの航海路＝海人族ネットワークの存在?!そこにおける「海神わたつみ」「山祇やまつみ」の出現、台頭?!

次に、ここでは、先号(14)からの続きとなるが、そこで構想した「海人族（南方系倭人→安曇族）の全国ネットワーク」に関わって、その想像の翼を、可能な限り広げてみたい！それが、まさしく、倭国（建国）の大きな原動力となったと考えられるからである?!具体的には、それは、日本海（山陰）ルート（対馬海流）、瀬戸内海ルート（内海流）、太平洋沿岸ルート（日本海流＝黒潮）の三つから成るものである?!最初は、「安曇族」の日本海（山陰）ルートが中心であったが、その行く先々には、またそれぞれの前線基地が創られた?!なお、それらは、祖先達（縄文人）「弥生人」の列島逢着・移動のルート（←沿海州、朝鮮半島、中国大陸、南西諸島等）と繋がっていた?!

ということで、日本海（玄海灘・山陰・丹波・越等）、瀬戸内海（国東、中国・四国内沿岸部）、そして太平洋（日向灘・四国太平洋沿岸部・紀伊・東海等）の、それぞれの「倭人・海人族ネットワーク」の在り様が、その後の倭国（→日本国）の大勢に影響を与えた?ということであるが、ここでは、特に、そこにおける「賀茂族」の関わり、彼らの動きや役割?について、少しまとまって考えてみたい！なお、「迦毛大御神かものおおみかみ」とも呼ばれる「味鋤高彦根命」（系）は、太平洋沿岸部の航海民（海人族）であったのではないか?!ある時期、彼（その神）は、雄略天皇によって、土佐の方に流されていたとされるが（そこでは、「土佐大神」とも呼ばれていた!）、それは、あの神武のモデル?、「カモタケツヌミ命」の実像をも彷彿とさせるものである?!

とまあ、今では、そういうことまで想像してしまうのであるが、とにかく、その「倭人・海人族ネットワーク」の存在は、例の「記紀」からも、容易に推察されることである?!と言うのも、神武が、「塩土老翁しおつつのおじ」（瀬戸内海海人族?→山祇やまつみ→住吉大神?!）に会い、彼から大和のことを聞き、「東方に、四方を山に囲まれた美しい土地（大和＝奈良盆地）がある。そこには、既に天磐船あまのいわふねに乗って舞い降りた者がいる。その地は必ず天つ日嗣の大業を広め、天下に充ち現れる（→統治する）に適したところだろう。国の中心にふさわしい地に違いない。その舞い降りた者とは、饒速日にぎはやひ命のことであろうか。ならば、私がかの地に赴いて、都をつくろうではないか」と、東征を決意したとされるからである（関裕二『ヤタガラスの正体』廣済堂出版、2016年より）!

もちろん、これが、史実であったとは到底思われないが（後世に、史実を素材にして創作された?!）、その物語が、他（勢力）からの情報入手から始まって

おり、そこには、ここで言う海人族（航海民）からの情報入手、すなわち、そのネットワークの介在が暗に示されているのである?!その航海民の長?が、ここでは塩土老翁（山祇→住吉大神→事代主神?）とされているが、彼（その神）は、瀬戸内海（国東、中国・四国内沿岸部）ルートを支配した海人族（住吉族）の長であり、伊予三島（大三島）の「大山祇神社（大山祇神）」、大阪の住吉大社（住吉大神）、さらには、伊豆三嶋の「三嶋大社（大山祇神）」等に奉じられている?!その伊豆には（も）、実は、件の「賀茂」の付く地名が多く、また、周辺の島々には、三島大神（大山祇神）を祀る神社が数多くある（その中には、古代の利器として重宝され、全国各地に運ばれていた「黒曜石」の一大産地?であった「神津島」も含まれている!）?!

一方、その（東征の）途中で水先案内人を務めたとされる珍^{うず}彦/椎根津^{しい}ね^つ彦（『日本書紀』）or 棹根津^{さおね}彦（『古事記』）もまた、まさに航海民・海人族であった?!この場合、『日本書紀』と『古事記』では、彼らの名前や邂逅の場所（速吸門^{はやすい}の）が異なっているが（前者は豊予海峡、後者は児島湾 or 明石海峡とされる?）、基本的には、そういうことであつたらう?!ちなみに、珍^{うず}彦・椎根津彦 or 棹根津彦は、その水先案内の功績が認められて?、その後、大和の「倭^{やまと}国造」（倭直部）となっている?!「倭^{やまと}」は、彼らがもたらした名前か?!

(2) 後から近畿・大和に侵入してきた?「伽耶系倭人」?!その根拠地(新天地?)、出立地が吉備であった?!

それはともかく、このように、海人族である彼らが、神武の東征（大和進出）を後押しした（協力者となった）ことは明白であり、初期の大和王権には、そうした海人族の血統が入り込んでいることは、多分間違いないであろう?!彼らが、記紀において、「海神^{わたつみ}」「山祇^{やまつみ}」との出会いという形で示されているわけである（それはまた、神武東征以前の、いわゆる「日向三代」の物語において、「コノハナサクヤヒメ」「トヨタマヒメ」「タマヨリヒメ」との婚姻話に投影されているのでもある?!）?!

しかるに、先にも述べたように、こうした「倭人・海人族の全国ネットワーク」は、最初は、いわゆる南方系倭人の「安曇族」のそれから始まったことは間違いないであろうが、そこに、「海神^{わたつみ}」（賀茂族?）や「山祇^{やまつみ}」（住吉族?）?!と呼ばれる、別系統の（あるいはそこから分派した?）神（勢力）が出現、台頭してきていたことも、多分事実であろう?!だが、もちろん、この系統（勢力）も、倭人・海人族ではある?!

そこで、こうした、まずは南方系倭人（安曇族）のネットワーク?は、その後、吉備を中心にして出来上がっていった伽耶系倭人（→物部系の勢力・ネットワーク）によって、かなりの変質（分裂・競合・和合）をきたすことになった

ものと思われるが、それは、もちろん、それぞれの部族・勢力の生存・生き残り（居住地、食料、器材・文化材等の取得・調達のための利便！）を賭けた交流・移動・進出の結果であろう?!これらが、「倭国大乱」であったり、「出雲の国譲り」や「邪馬台国の興亡」を惹き起こしたりしたということでもあろう（ただ、それらが、真実として、正しく伝えられているかどうかは別問題ではあるが?!）?!

ところで、大和に最初に舞い降りた（船を使って現れたということの比喩?!）という饒速日にぎはやひ命とは、いわゆる「物部氏」の祖とされる人物であるが、関氏によれば、彼は、吉備から来たとされている?!直接的には、私もそれに同意するが、その物部氏が、それこそ吉備の土着の豪族?であったわけではなく、彼らもまた、ある時期吉備に移動し（→楯築遺跡）、そこからまた、大和に移動した部族（勢力）であったことは、ほぼ間違いないであろう?!おそらく、彼らは、北部九州から移ってきたと考えられるが、当然?それ以前は、韓半島のどこからか移動してきた部族（勢力）であろう（伽耶勢力→太陽信仰部族?!）?!

ちなみに、その伽耶系倭人とは、おそらく初発の朝鮮半島最南端の「金官」（駕洛/南加羅→後に、それは「任那」と呼ばれた?!）、そして「安羅」・「小伽耶」であり、後発の半島内陸部の「多羅」・「大伽耶」（高霊）・「星山」の人々であった（これらの国々は、「六伽耶」と呼ばれる!）?!おそらく、前者が「崇神（勢力）」、後者が、後の「応神（勢力）」に仮託されている?と思われるが、その大伽耶（高霊）等は、歴史的経緯としては「百済」に包摂され（流出?し）、いわゆる「応神」以降の歴史は、その流れの中から生成、変化してきたとも考えられる（ただし、その後百済は、最終的には、「倭国→日本」が、宗家として継承した?!その集大成が、「桓武」の時である?!）?!

なお、記紀・伝承等においては、前者の文化（言葉や伝承物等）や勢力は、後に「新羅」（←辰韓←弁辰）という形で包括・整理され（「伽耶」滅亡後は、実体としてもそうなった!）、後者の文化（言葉や伝承物等）や勢力は、「百済」（「伽耶」滅亡後は、ここも、実体としてもそうなった!）という形で包括・整理されているのではないか?!

(3) 「賀茂族」（「海神わたつみ」?）と「伽耶系」（「山祇やまつみ」）!そして、「賀茂」と「出雲」「熊野」との関係は?!

とは言え、問題は（多少唐突ではあるが?）、その「伽耶系」（勢力）と南方系の「賀茂族」（勢力）が、何故、吉備において隣接しているのかである（合流 or 同盟?→楯築遺跡+賀茂・賀茂西遺跡!）?!しかも、その両勢力（の一部?）は、藤井耕一郎氏によれば、近畿・大和に進出（「龍王信仰」を共有する、後の「前方後方墳・手焙型土器」勢力→「ワニ=オウ?」勢力の近江結集・大和移動?!）する前に、出雲の方に出かけている（侵略 or 一部同化?）?!おそらく、そこでの関係・状況が、実は、「記紀」の「高天原神話」「出雲の国譲り神話」に投影

されているとも言える?!

そして、これに関わっては、いわゆる「熊野」(の地名)も気になってくる(「熊の野」ということであれば、例えば「球磨→熊 or 隈?」というような連想(関係把握→九州中部)も可能ではあるが?)?!つまり、ここで興味がもたれるのは、「熊野(神社)」には、必ず?「素戔鳴命」が関係してくることであるが、出雲の「熊野」(熊野神社)と紀伊の「熊野」(熊野大社/本宮・那智・速玉)の関係は、どうなっているのかということである?!どちらが先行する「熊野」なのかは、今のところ判断はつきかねるが(双方の説あり?!)、その地が、いわゆる「尾張氏」の移動・居住に関わるものであれば、出雲の「熊野」の方が、先にあったようにも思われる?!

何故なら、「尾張氏」は、吉備から出立した「龍王勢力」(→後の前方後方墳勢力)の一派?であり、彼らは、先に出雲に進出し(→「出雲の国譲り」の先兵?アメノホヒの後裔!しかも、そこに残った「出雲国造家」(出雲臣氏)は、自らを尾張氏の末裔としている?!)、その後近江経由?!で、伊勢・尾張、そして紀伊半島、さらには大和葛城の「高尾張」に、その拠点(居住地)を広めていったものと考えられるからである(→葛城王朝?)?!こうなれば、まさに地理関係的にも、その蓋然性が高いと言わざるを得ない?!

さらに、その紀伊の熊野と言え、例の「神武東征」の折、当地の悪神の毒気(熊の神威?)に侵されて、神武一行が衰弱状態に陥っているところを、天香久山(尾張氏の祖)の子の「高倉下^{たかくらじ}」に救われているが、その高倉下が入手していた霊剣「布都御魂」(石上神宮に所蔵)は、実は、素戔鳴命が八岐大蛇を対峙した時に使用した「十握剣^{とつかのつるぎ}」(多分、銅剣?)とも考えられ、その時に八岐大蛇の中から出てきた剣(←多分、鉄剣?)は、いわゆる「三種の神器」の一つ「草薙の剣」(天叢雲剣^{あめのむらくものつるぎ})である!それが、尾張氏の奉斎する「熱田神宮」に所蔵されている事実?(素戔鳴命が天照大神に献上し、それが尾張氏に下賜された形をとっている!)を知れば、その関係が、ある意味透けて見えてくるのではないか?!

一方、これについては、『先代旧事本紀』(天孫本紀)では、物部氏の祖神である饒速日命の子で、尾張連らの祖天香語山命(越後の「彌彦神社」の祭神でもある!)の割註に、「天降り以後の名は手栗彦命または高倉下命」とされているらしい!その後、同「本紀」では、『日本書紀』と同様の内容が記されているということであるが、尾張氏・紀氏等と同族の「海部氏系図」(『勸注系図』)においては、始祖「彦火明命」(饒速日命)の児「天香語山命」の註に、(彼は)「大屋津比賣命」を娶り、「高倉下」を生んだとされ、始祖の孫(天香語山命の子にあたる)天村雲^{むらくも}命の弟として、“弟熊野高倉下 母大屋津比賣命”とされているという。ただし、「記紀」では、「天彦火明命」の子が「天

香語山命」で、その子が「高倉下」とされている！

いずれにしても、海部氏、尾張氏、紀氏は同族であり、彼らは、新たな（別の？）「海人族ネットワーク」の中心勢力であった?!そして、その尾張氏が、他の「前方後方墳勢力」を裏切り?、もう一つの「前方後円墳勢力」（物部系）に合流し、大和纏向に三輪王朝を実現させた?!おそらく、鉄の支配・流通経路の確保からの、彼らの保身・転身であろうが、別言すれば、当初日本海沿岸部の諸勢力（前方後方墳勢力）と一緒に動いていたが、瀬戸内海沿岸部を制覇してきた、もう一つの新しい勢力（吉備＝日神信仰勢力→崇神）と結託し、新たな「前方後円墳勢力」（→初期大和王権）を形成した?!だから、尾張氏は、謎も多く、解明が難しいということでもある?!

16 「行った（派遣した）」という「話」は、そこから来た（集まってきた）という「話」?!

(1) 「記紀」の「論法？」を探せ（見破れ?!）!それは、逆又は違う方向から「反転」されている?!

さて、これは、最近のテーマ（流れ）からすると、少しスタンスが異なってくるようにも思われるが、標記の問いかけ（疑問）について、少しまとまった考察（推測?）をしておきたい!何故なら、例えば先々及び先号（14、15）において、「賀茂族」あるいは、それらの海人族全体の全国展開についての考察（推測?）を行ったわけであるが、彼らが居住していた地域や通過していった地域、あるいは交流関係を有していた他の部族（勢力）との関係は、ある意味総体としては分かるのであるが?、その個々の関係の、具体的には時間的な関係（前後関係）がよく分からない、あるいは単純な場所比定的な理解では、「矛盾?」が生じてしまうということである?!

これは、考古学的なアプローチはともかく（一応、それなりの妥当な分析・判断が下される?!）、「記紀」等において示される、それらの関係あるいは時間的な前後関係が、よく分からないということであるが（他の人達の研究成果からではあるが!）、ただ、その分からない（矛盾を感じさせる?）情報（史実?）が、特に「記紀」によって、意図的に創作?されているのだとしたら、その意図を見破り、実際はどうであったのかの考察（推測）を、改めて行う必要があるのではないかということでもある!例えば、その考えられる大きな作為とは、標記のように、「記紀」が、「誰かがそこから来た（集まってきた）」という『話』を、誰かがそこに『行った（派遣した）』という『話』にしているのではないか」ということである?!

尤も、こうした観点（推理?）は、例の関裕二氏の著作で指摘されていたことでもあるので、まったくの私のオリジナル（アイディア?）ではない!その意味では、まさに追従ということであるが、いずれにしても、もし、「記紀」が、標記のような方法（そのような作為?）で、真実とは違って、幾つかの重要な史実?を語っている（偽っている?）としたら（大いにあり得る!）、多くの?、それらに関する矛盾や理解困難さが、ほとんど?解決されることとなる?!そんなことを、思う次第なのである!

しかるに、そうした方法論?が、幾つか「常習的に?」使用されているとしたら、それはまた、「記紀」執筆の「基本的立脚点（「論法」）」ということにもなる?!したがって、その「基本的立脚点（論法）」を、遅ればせながら、今我々が探す（見破る）ことができたならば、それこそ、飛躍的な理解の進展を遂げることが出来るということでもある?!ただし、繰り返すように、それを示す直接の文献はもちろんなく、言わば考古学的アプローチによって推測（推理?）

するしかないのでもある?!

(2) 具体的には、どこに、どのように、その方法論（論法）が駆使されているのか?!

では、そのことを踏まえて、改めてもし、それが本当であるとしたら、「記紀」は何故、そうした「方法論（論法）」を駆使したのであろうか?!もちろん、考えられるのは、その場合の行先（到着先・派遣先）が、現政権にとっては、欠くべからざる重要な場所であった?!もっと端的に言えば、現政権の（先祖達の?）、それぞれの出身地あるいは、その後の出立地（経由地を含む!）であったということである?!あるいは、そこ（その地）を、ある意味、明確に記さなければ、多少の良心の呵責は覚えても、まったくの虚構話とならざるを得ないからということも考えられる?!たとえその時（執筆時点）には、そうした関係が見えなくなっている、あるいは「そのことを書き記したくなくなっているも?」である?!端的に、それがなければ、「記紀」（自らの歴史?!）のストーリーを、具体的に創作?することができなかつた（素材としては必要であった?）ということである?!

なお、このようなこと記すのは、かなり不自然ではあるが、これまで、「記紀」という表記で、まったく両者は、本質的には「同じ（ストーリーを書く）歴史書（物語）である」とする前提で表記してきたが、もちろん、そのスタンス、扱っている時期（『古事記』は推古天皇まで、『日本書紀』は持統天皇まで!これも、何か暗示されているようにも思える!）、作成・記述の目的は、それぞれ違ってはいる（関係氏族の思惑や言い分!）?!したがって、「記紀」という表現は、それらを見捨てた、かなり単純（乱暴?）な扱いとなっていると言えなくもないのである?!

しかし、その表記は、他の多くの方の表記と同じように、あくまでも文脈、論のモチーフ次第で書き分けられればよいのであって（出来ていない場合もあるが?）、その表記自体に、あまり固執する必要はないであろう?!しかも、それらは、多分?それらの土台、材料となっている、共通の文献（『原日本紀』みたいなもの?）が先にあった（創作されていた!）と考えられ、その意味においては、両者は、大きくは同じモチーフ、同じ内容構成で、納得・執筆されていると考えてよいのである?!逆に言えば、その違うところをクローズアップさせ、その違いの意味（言わんとするところ）を抉り取ることが、別の意味で重要なものかもしれない?!

ところで、その方法論（逆又は違う方向から「反転」させるということ）が、最も大きく、そして意図的に展開されているのが、上記の関氏も指摘している?、いわゆる崇神天皇による「四道將軍の派遣」であろう?!詳しいことは、ここでは紹介できないが、要するに（『日本書紀』によれば）、第10代崇神天皇

が、より大和王権の支配圏を拡大・強固にするために、四方（北陸道、東海道、山陽道、丹波道）に、当時の皇族将軍（大彦おおびこ、武渟川別たけぬなかわわけ、吉備津彦きびつひこ、丹波道主たにわのみちぬし）を、それぞれ遣わしたとする記事（事件？）のことであるが、崇神天皇の下で、大和王権の全国支配が進んだ（確立した？）ということ、それによって示すものであったであろう?!まさに、彼を（も!）、「ハツクニシラスメラミコト」（初代王）とせんがためである?!

しかしながら、（一方の）『古事記』では、山陽道の吉備津彦の派遣のことが欠けているらしい!ただし、それに相当?するもの（同じような記事?）が、彼（崇神）より少し遡った第7代孝霊天皇の時に扱われており、大吉備津日子命と若建吉備津日子命が、「吉備」を平定したことが記載されているらしい!したがって、『日本書紀』の話は、その『古事記』の話の「合体話?」、ないしは「変形話?」となっているとも考えられる?!どちらかが、どちらかの話の脚色?をして、語っているのかもしれない?!ただし、公式な?作成年代からは（前者が720年、後者が712年とされるが）、そんなに単純には比べられない?!

(3) 最も怪しい吉備（高天原?!）の扱い?!天照大神を皇祖とした「万世一系化」にはどうしても必要だった?!

もちろん、その真偽についても、誠に疑わしいものがあるが（その時期、多くの部族・勢力が、逆に近畿・大和に?集まって来ている?!）、ここで問題としたことは、改めて、何故、そのような物語が、『日本書紀』の崇神天皇の時代に挿入?されているのかである?!しかも、まさに「逆又は違う方向から『反転』させた形で、その物語を構成しているのかである?!その単純な答え?は、繰り返すように、その「崇神天皇」の時代に、実質的な?、いわゆる「大和王権」が成立したということと、その成立が、記紀編纂時の権力者（藤原氏）の、直接の先祖達の事績であったということ、もしくは、（諸般の事情で?）そのように記さなければならなかったということであろう（あまりに強引な建国・先祖話も、できなかったということでもある?）?!

例えば、「大彦」や「武渟川別」の真相は、いわゆる「出雲の国譲り?」の後、吉備（高天原?!）勢力の一派が、出雲を経由（踏み台?に）して、北陸や東海地方に進出していったことを示すものではないのかということである（事実、出雲から、近江を経由して?、北陸や東海地方に、人々が移動・進出していったことは、考古学的にも実証されている!）?!そして、それらの勢力（氏族）が、大彦を祖とする「阿倍氏」だと見なされているということである（大彦は、第8代孝元天皇の第1皇子で、第11代垂仁天皇の外祖父。ちなみに、武渟川別は、その子である!）?!端的に、それらの史実を、近畿大和（崇神天皇）の事績（皇軍派遣）としたということである?!

次の「丹波道主命」の、大和からの派遣というものも、実は、怪しいのでは

ないか?!むしろ、その逆であった可能性の方が高い?!あるいは、当初その逆であった関係（彼の一族は、近畿での鉄の流通において、当時一番の有力勢力であった?!）が、後に在地勢力の変化あるいは反発等もあり、もともとは同族・同盟関係にあった大和（政権側）が、何らかの掣肘、別の勢力を差し向けたということではなかったのか（考えられるのが、天日矛 or ツヌガアラシトの越・丹後進出・支配及び九州への進出→神功皇后・武内宿禰説話?）?!

まさに、そうした史実?を受けての、丹波への皇軍派遣であった（そのように造作した?）ということである?!それは、具体的には、京都府宮津市の「籠この神社」の海部氏（尾張氏・紀氏を含む?）、あるいは兵庫県豊岡市の「出石神社」の天日矛・出石族との関係であろう?!ちなみに、私は、ここら辺りの解明が、一番難解ではあるが、（その意味で?）最も鍵を握る場面であろうと、以前から、かなりの確信?をもって眺めている?!ただし、まだまだ、その解明の「折り返し」にも達していない?!

もちろん、それはともかく?、ここにおいては、まさに崇神天皇による「四道將軍の派遣」とは、そうしたヤマト王権の成立に関わる重要な事実?（時代・場所的には、それぞれ異なる?）を、決して大和側からの王権発動というものではなかったにも拘わらず、その大和王権の成立過程として、逆方向に収束させていく、言わば「反転・逆モーション映像?」の集合体（作品?）として、描いているのではないかとということである?!

翻って、ここで最も臭い（大いなる作為がある?）のは、「吉備津彦」の派遣であろう（だからこそ、『日本書紀』と『古事記』の記載も、そこが違う?あるいはまた、そこが、『古事記』編纂の多（←大←富・意富お←和珥族?）氏の言い分でもあるのであろう?）?!どういうことかと言うと、後に近畿・大和に移動・進出した「吉備勢力」が、「手焙形土器」を携えて、河内・近江に移動・集結し（→前方後方墳勢力）、そこを起点にして、改めて東西の「環濠集落勢力→安曇族?」の討滅を開始したことを、この「吉備津彦」に投影させているのではないかとということである（もちろん、その後、在地に残っていた「吉備（上道氏・下道氏）」と、実際に諍いを行っていたことは事実ではある!）?!

このように、ある時期に、その吉備に進出・支配したように、『日本書紀』は、吉備津彦を創作?して、「四道將軍の派遣」（の一つ）としたということであるが、多分その事績は、もともとは、多（←大←富・意富お←和珥族?）氏（神武天皇の、大和?での長子とされる「神八井耳命」の子孫!彼または彼の子孫（の一部?）は、何故か、その後九州に移動し、肥（火）君、大分君、阿蘇君、筑紫三家連等に分かれていったとされている!）の祖先達（前方後方墳勢力?→以前紹介した、藤井氏が唱えた「ワニ氏族」）の、吉備（実際は出雲?）での事績を指していたのではないか?!

だから、記紀編纂時には、『日本書紀』編纂勢力（藤原氏）に直接抗うことが出来なくなっていた「多」氏が、そのことを、たとえ「欠史八代」と呼ばれるような、あやふやな（史実とは思われそうもない？）時代？のこととしてではあるが（だが、多分、そのことは、ある意味史実であった?!）、孝靈天皇（第7代）の時に、大吉備津日子命と若建吉備津日子命が、吉備（この場合は、実際は「出雲」?!）を平定した話として、つまり自らの祖先達の偉業として、裏（斜め？）からそれを顕彰？するために、その記事を成したということである（流石に、それ自体は、藤原氏からは咎められることはなかった?!）

17「秦氏」と「応神」、そして「蘇我氏」との関係?!いよいよ、大本命?「秦氏」の怪に迫る?!

(1) 謎の豪族?「秦氏」は、改めて何者なのか?そして、どこから来て、どういう役割を果たしたのか?!

さて、いよいよ、大本命?「秦^{はた}氏」の謎(怪?)に迫る時がきた?!とにかく、この「秦氏」は、応神天皇の御世に(「記紀」の、この時期の年代と史実?は、120年ほど食い違っているとされるので、実際は5世紀前半?!)、先祖?である「弓月の君(融通王)」が、辰韓(後の新羅の地?実際は、百済?)から大挙して(120 or 127? 県の民と一緒に!)、倭国へ渡来してきたとされる?!

そしてまた、それ以前は、中央アジアの「大月氏国(パルチア)」から移動し、ユダヤ教・キリスト教(ネストリウス派=景教)を伝えたともされる?!また、いわゆる「(イスラエルの)消えた10部族」の末裔ともされる?!さらには、秦の始皇帝の末裔ともいわれる?!まさに、気味が悪いくらいに?不思議な氏族(勢力)なのである?!

それはともかく、まずは、この秦氏は、豊前国(福岡県東南部・大分県北東部)に最初の扶植地(→「秦王国」?)を作り、後に列島各地へ拡散していったとされる?!

ちなみに、その中心地(根拠地)は、播磨国(赤穂市坂越^{さこし})の「大避^{おおさけ}神社」辺り、そして、最終的には?、「太秦^{うずまさ}」と表記される、京都市西部地域(葛野^{かどの}の地方)である(→広隆寺、木嶋坐^{このしまにます}天照御魂神社及び大酒^{おおさけ}神社等あり!)?!

それにしても、改めて、この「秦氏」は、我が国の古代史において、どのような役割(存在)を果たしたのであろうか?!

それについては、例えば、蘇我氏との親密な関係(→秦河勝)、そして、氏寺広隆寺・関係神社等の異様な光景、それにまとわる聖徳太子の幻影?、さらには、平安京を開いた桓武天皇との関係等々、そしてまた、その中での、松尾大社(京都)や稲荷大社(伏見)、金比羅さんで有名な、香川県金刀比羅宮等の建立や経営がある?!

さらにはまた、「秦」の名を帯びる、全国の秦名・秦地名(秦・幡・旗・羽田・畑・波多・波田・機、秦野市・幡ヶ谷市?等)の多さが注目される!

故に、そういうことが、彼らの役割(素性?)の解明にヒントを与えている?!そのそれぞれについては、ここでは詳しく紹介することは出来ないが、以上のように、秦氏が、我が国古代史において、まさしく重要な(しかし、怪しげな?)役割を果たしていたことは間違いないのである?!

だが、何故か、歴史の表舞台(「記紀」の物語?)に、正面切っては、顔を見せないのでもある(そこがミソ?これは、藤原不比等も同じ?!つまり、大事な局面?)

に深く関わっている、あるいはその当事者であったからこそ、そのようにした?!)?!
一体、そこには、どのようなことが隠されているのか（このことは、例の関裕二氏の指摘でもあるが!）?!

そこで、ここでは、まったくの妄想?となるのかもしれないが、一つの大きな仮説として、古代（史）における第3波?の、西（半島?→九州）から東（近畿・大和）への、（ある）氏族・勢力の移動・進出がある（それは、「応神」のそれなのではあるが!）?!

そしてまた、そこに、「神功皇后」や「武内宿禰」、そして、それと多分関わっている?「継体」や「息長氏」（香春岳周辺の精銅勢力。その後、近江・琵琶湖西岸に本拠地を移した?!）、そして「秦氏」（『隋書』に見える、倭^{たい}国東部の「秦王国」?!）の移動・進出が投影されているとしたら、果たしてどうなるのか?!

何を言いたいのかというと、「応神（百濟王族?）」と「息長氏」、そして「秦氏」の（東への）移動・進出が、同じ時代・同じ勢力の移動・進出であったのだとしたら、そこが一番大きな事件?（隠されていること!）であり、その解明が、この時期の謎を解く最大の鍵なのではないか?!

そして、それは、（北部九州での）「神功皇后」「武内宿禰」「住吉大神」の物語（実は、神武の子・神八耳命の後裔である「多^{おお}（意富）氏」の九州進出の反映譚?）、そして、そこから見えてくる?「継体」以降の動き?の解明につながるのではないかということでもある?!

(2)「乙巳の変」に関わっていた秦氏（河勝）?! そうであれば、幾つかの謎は解ける?!

ところで、改めて、「秦氏」については、関裕二氏の、誠に大胆な?、しかしながら、十分可能性のある推理がある!

それは、ここで、余りに簡単に紹介させてもらうのは、甚だ申し訳ないとは思いますが、古代史上最も激変をもたらした、いわゆる 645 年の「乙巳の変」（中大兄皇子と中臣鎌足による、当時の実力者「蘇我入鹿」の暗殺?事件→クーデター?）の実際上の実行犯が、実は「秦河勝」ではないかという指摘である!

その惨劇を目撃していたという「古人大兄」の目撃談?、「韓人^{からひと}が鞍作臣（入鹿）を斬った!」というところの、まさにその「韓人（半島からの渡来人）」が、「秦河勝」だったというのである!

しかるに、こういう背景（経緯）の中で、その後も隆盛?を極めた秦氏が、件の修史作業（記紀編纂、とりわけ「日本書紀」）に、陰に陽に、その影響力を行使したことは想像に難くない（内容のチェック等）?!

端的に、記紀、とりわけ「日本書紀」は、藤原氏の正義・正統性を演出するものであるが、他の多くの証拠（傍証?）からも、結果的に、秦氏が、藤原氏の権力奪取?に加担・協力したという結論が導き出されるということでもあ

る?!

例えば、あの「聖徳太子」の存在もそうであるが、その子の「山背大兄皇子」の存在も危ういものである（その傍証の一つに、彼の膨大な一族は、この時全員が自死し、その後の子孫は一人もいないとされる?! 実在していたならば、こういう奇妙なこと? は起こらない!）?!

すなわち、「秦河勝」は、「聖徳太子に寵愛されていた」ということであるが、その聖徳太子自体は、蘇我氏を悪者に仕立て上げるためのダミー偶像だと考えられるので（もちろん、そのモデルは、蘇我氏の誰かであり、多分それは、他ならぬ入鹿である?!）、本当は、秦氏（河勝）は、蘇我氏を疎ましく思っていたということでもある?!

ただし、蘇我氏（入鹿）に頼られていたということは事実であろう?! その意味では、ある種の「裏切り?」ということでもある?! だから、恨まれている?! だから、歴史の表舞台に出てこない（これない?）ということである?!

しかも、これについては、面白い話がある! それは、実物の聖徳太子像と言われる、秦氏（氏寺）の広隆寺の「弥勒菩薩像」について、当寺（秦氏）は、その菩薩像に、天皇の着衣（天の羽衣?）を、毎年かどうかは忘れたが、着せ替えさせてきた? ということである?!

もし、そうであれば、それは、他ならぬ、大いなる「懺悔」「罪滅ぼし?」の形であることは間違いない?! 要は、世人が認める大義名分が、その殺人?（クーデター）にはなかった?! つまり、蘇我氏は、正当な権力者（王家?）であり、まさしく善玉であったということでもある?!

と言うことは、そこには、壮大なからくり? があり、聖徳太子（の存在）は、日本書紀を編纂した藤原氏（不比等）によって創作された蘇我氏（入鹿?）の虚像であり、本来の王族（上宮王家）であった蘇我氏（本宗家）を悪逆な手法で葬り去った藤原氏の、まさに歴史の捏造（事件の隠蔽）であったということである?!

しかも、そのからくりは、聖人「聖徳太子」がそうであればあるほど、その子「山背大兄皇子」を滅ぼした（とされる）蘇我氏（入鹿）は、極悪人となっていくという、考えてみれば、まことに恐ろしいドラマ仕立て? だったのである?! あまりに狡猾な?、歴史改竄? の手口だったのである?! それに、秦氏が、一枚噛んでいたわけである?!

したがって、そのことと、すべてが結びつくかどうかは分からないが、秦氏（本宗家）が、（そうした罪悪? によって?）俗世の人達からは疎まれ（恨まれ?）、公け（政治）の場には、直接顔を見せることがなく（出来なかった?）、産業振興や商業あるいは宗教・文化的な面で、大いに活躍（暗躍?）し、財力もつけ、例えば、桓武の「平安京」遷都に際しては、広大な土地と費用を提供したので

もある！

いずれにしても、歴史の前面に出ることがなかった（出来なかった）ということである（これらも、基本的には、例の関裕二氏の本からである！）?!

(3)「素戔嗚命」（辰王国の宗家？）と関わる「秦氏」?!しかし、列島では、百濟系（藤→応神）と組んだ?!

翻って、実は、本号(17)を書き進めるにあたって、もう一度、あの難解な、斎藤忠氏の本『消された日本建国の謎』を読み込んでみた！

もちろん、そこには、彼の偉大なる？理論、つまり「列島における『ヤマヒト』と『ウミヒト』の相克史」が、驚くばかりの視点や切り口（分子生物学の知見や倭人の「戯訓術」の解析等）によって展開されているのであるが（正直言って、かなりの予備知識と理解力、そして辛抱強さが求められる？）、その相克(史)？における「秦氏」の存在・役割が、半島(史)と列島(史)の関係の中で示されているのである！

「倭」「倭人」、「倭国」「日本国」、「邪馬壹いち国」「邪馬臺だい国」、さらには「大八洲国」「葦原中つ国」、あるいは「日華国（対馬？）」「月氏国（壱岐？）」等の概念、相互関係、その版図等、そしてまた、そこにおける「スサノオ（牛頭天王）信仰」、八坂神社や日吉大社（「大山咋」信仰）、さらには松尾大社や稲荷大社等、その信仰の背景や意趣等に関わる、「大倭人おおあま族」の、半島及び列島（壱岐・対馬を含む!）における、各々の氏族・勢力の関係や移動・進出の実相？が、実に細かに描かれているのである?!

とにかく、改めて、そのような知見？の中で、秦氏（の事績）と応神（の人格・事績）、そして蘇我氏は、一体どのような結びつきがあるのか？

繰り返すように、私は、記紀の「万世一系づくり」の中で、「応神」（の存在・役割）が最も重要な部分であり、それはまた、ある特定の人物（勢力）の存在・役割の投影であると睨んでいるのであるが、そこに、秦氏や蘇我氏が、どのように絡んでいるのかということである?!

すなわち、応神の母親とされている「神功皇后（息長帯姫）」や、その父親とされている「仲哀」（ないしは「武内宿禰」?→私は、こちら方ではないかと思っている!）については、その信憑性（史実性?）はないと思われるが、氏の所論からは、通説の枠組み（手枷足枷?）を越えた、半島と列島の、まさしく「大倭人族」の国（連邦?）と、そこにおける各部族・勢力（半島側では、後の馬（慕）韓・辰（秦）韓・弁韓<弁辰→伽耶6国?>）。列島側では、倭奴国、倭国、邪馬壹いち国、邪馬臺だい国といった国または諸国）の全体の関係や、そこにおける交流や衝突の足跡が、驚くほどの枠組み？の中で示されているのである?!

「応神」、そして「秦氏」は（もちろん「蘇我氏」も?!）、その大きな枠組みの中で捉えられるべきものだということであるが、たとえそれが、今はまだ「勇

み足？」であったとしても、これまでになかった、新たな可能性（史実？）を示すものであることは間違いない？！

蓋^{けだ}し、そこに「秦氏」と「素戔嗚命系？→蘇我氏」の関係（双方は、「辰王国」の連枝？）が横たわっているのである?!そして、そのことは、一方で、例の兼川晋氏の指摘、すなわち、百済の王族（本宗家沸流^{びりゅ}系余氏）・滕^{とう}（久留米市の「高良大社」の祭神「玉垂命」or「高良大菩薩」とされている?!）が、まさに「応神」に仮託されているということがあるが、その辺りの知見（推理？）と重ね合わせていけば、「蘇我氏」と「秦氏」が、実は、のっぴきならない「因縁」で結びついているということにもなる?!

例えば、件の「蘇我氏」であるが、そこには、まさに「蘇る我れ！」という戯訓が込められているというが（これも、関裕二に拠る！実際には、多くの用字・当て字も存在するが?）、（北）九州において?「上宮王家」として蘇った?「蘇我氏」が、「応神（滕?）」を介して、稻目・馬子の代に、大和飛鳥に拠点を移した?!

すなわち、「武内宿禰」の末裔とされる「蘇我氏」（葛城・平群・紀氏等も!）は、大きくは「出雲系」とされるが、その「蘇我氏」が、（北）九州で、そしておそらく、百済の王族（滕）の渡来との絡みの中で、具体的には、「貴（基肆^{きい}）国→大倭^{たい} or 倭^{たい}国」において、まさしく「蘇る我れ！」となった?!そんな構想（夢想?）も、今新たに頭を擡げている状況なのでもある（繰り返すが、その辺りが、記紀においては一番量されている?!）!

なお、これが解明出来れば、ほぼ私の古代史の旅も終わる?!しかし、まだまだその途上であることは言うまでもない?!

18 「大国主命」と「素戔嗚命」「事代主神」の関係、そして、改めて「出雲」とは?!

(1) そもそも、「大国主命」とは、一体何者なのか?! 7つの名前（顔）をもつ男?! 10人の妻と130人の子ども?!

ここで、もう一つはっきりさせておきたいのが、出雲の大国主命おおくにぬしのみことと、その出雲（神）の系譜についてである!

いわゆる「記紀」における「素戔嗚命すさのおのみこと」の出雲降臨（進出?）、それを引き継いだ大国主命の国造り（+「少彦名すくなひこな」?!）、そして、その後の「高天原（吉備?）」勢力への「国譲り」と、裏の（譲られる側ではあるが、多分真の?）主役である出雲（神）、とりわけその大国主命とは、どのような人物（神）で、彼ら出雲族（神）は、一体どのような存在で、「記紀」では、どのように描かれているのであろうか?!

「素戔嗚命」との関係（岳父関係?）は後で触れるが、まずは、その「大国主命」が、まさに「出雲」を代表する人物（神）で、異名・別名の多さも含めて、まさしく我が国古代史の最重要人物であったことは間違いないのであろう?!

まだまだ、ここでまとまった考察（さらなる推理?）が出来るほど、材料が整っているわけではないが、やはり、これまでの流れからすれば（南方系の倭人・海人族=安曇族の先住・拡散、次の半島最南部の伽耶族の渡来と北方系?の百済系倭人との交流・相克<「応神（藤?）」の渡来、その後の→天日矛→神功皇后・武内宿禰→事代主・住吉大神勢力?の活躍?!あるいは「海神わたつみ（住吉大神?）」と「山祇やまつみ（三嶋大神?）」の相克?>）、そこにおける「出雲（神）」、そして、その、いわゆる「大和王権」における立場・関係について、少しはここでも進展させておかなければならない状況にあるので、敢えて挑戦してみたいと思う次第である!

ちなみに、大国主命の異名・別名としては、大穴牟遲おおなむち神、大穴持おおなもち命、大己貴おほなむち命、大汝おほなむち命（『播磨国風土記』）、大名持おおなもち神、国作大己貴くにつくりおほなむち命、八千矛やちほこ神（素戔嗚命の娘・須勢理毘売との歌物語での名。矛は武力の象徴で、武神としての性格を表す）、さらには、葦原醜男あしはらしこを・葦原色許男神・葦原志許乎（「しこを」は強い男の意で、武神としての性格を表す）、そして、大物主おおもものぬし神（『古事記』では別神とされる。『日本書紀』では、国譲り後の別名?!）、大國魂おほくにたま大神、顕国玉うつくしにたま・宇都志国玉神（国の魂の意）等である!他にも、伊和大神いわおほかみ（『播磨国風土記』）、所造天下大神あめのしたつくらしおほかみ（『出雲国風土記』）、幽冥主宰かくりごとしろしめす大神、杵築大神きづきのおおかみといった具合である!何とも、驚くばかりである?!

そして、さらには、この大国主命は、様々な女性（神）との間に、多くの子

ももうけている！その数は、『古事記』では 180 柱、『日本書紀』では 181 柱。そして、『古事記』においては、以下の 6 柱の妻神がいたとされる（ただし、日本書紀では、古事記にはみえない妻神が、さらに 1 柱おり、『出雲国風土記』では、それ以外にも、さらに何人もの妻神があったとされている?!）。

具体的には、須勢理毘売すせりびめ（スサノオの娘。最初の妻で、正妻。）、八上比売やがみひめ（根の国からの帰還後では最初の妻とされる。間に木俣このまた神）、沼河比売ぬなかわひめ（高志こし国における妻問いの相手。間にミホススミ<『出雲国風土記』>、もしくは建御名方神<『先代旧事本紀』>）、多紀理毘売たぎりびめ（間に味鋤高彦根と下照比売の二神）、神屋楯比売かむやたてひめ（間に事代主）、さらには、鳥取とりの神（八島牟遲能やしまむじの神 or 八島士奴美やしまじぬみの神の娘。間に鳥鳴海とりなるみ神！『古事記』には、それ以降の系譜が、9 代列挙されている?!）といった具合である?!

以上は、ほとんどネット情報からまとめたものであるが、とにかく、こうした異名・別名の多さや妻子の多さは、大国主命（柱となる出雲神→杵築/出雲大社）が、古代において、幅広い地域で、様々に信仰（尊崇）されていたことを示し、その広がりと共に、各地域で信仰（尊崇）されていた土着の神と習合されたり、あるいはその土着の神の子が、彼の妻や子に位置づけられたりしているということであろう?!

やはり、出雲（神）は、古代（のある時期まで?）の盟主的存在（「豊葦原中つ国」?）、あるいは中心であったということである?!

(2)「素戔嗚命」「事代主神」、そして「味鋤高彦根命」との関係は?!「恵比寿大黒様」は、何を意味する?!

ところで、その大国主命と関わっては、例の「国譲り」の前（前哨戦?）に、「天雅彦あめわかひこ」（アマツクニタマの子。詳細は不明!）が、出雲のへ攻撃はおろか、そこに同化し、大国主命の娘（宗像三女神の長女・多紀理毘売との間の子・下（高）照姫→伽耶奈留美?）と結婚しているが、その「天雅彦」とそっくりの「味鋤高彦根命」（下（高）照姫の実兄）が、その「天雅彦」の葬儀の時に、その似ていることを「天雅彦」の親に指摘されて（喜ばれて!）、不思議なことに? 激怒し、喪屋を斬り壊したということである!

何とも、おどろおどろしい話である（実は、あり得ない? だから、何かのメッセージ性がある?）?!

しかるに、この「味鋤高彦根命」と「天雅彦」が、瓜二つ、そっくりであったという人物仕立て? は、件の「記紀」の常套手段の一つであろうが（以前にも述べたように、何かの重要メッセージ?）、ここで考えられるのは、彼らが、もともとは同族であったが、あることを境に、関係・利害が相反するものになっていたという寓意? ではないか?!

単に、話を面白くする（or 史実をはぐらかす？）ために、そうしたとんでもない？エピソードを挿入したとも考えられるが、記紀の「ドラマ仕立て？」は、そんなに単純ではないようである？！

と言うのも、「記紀」で、その「味鋤高彦根命」は、たとえ大国主命の子であるとされているにしても、大和では「迦毛^{かも}大（御）神」とも呼称され（出雲から大和に移住したとする説もあるが?!）、葛城（御所市）の「高鴨神社」（京都の「上賀茂神社」「下鴨神社」の元宮？）の祭神とされている人物である！

しかも、その神（人物？）は、葛城賀茂社の鴨氏が祭っていた大和の神ともされ、『古事記』で、最初から「大御神」と呼ばれているのは、天照大御神と迦毛大御神だけである？！

単なる、大国主命の子ではないのである?!そこには、いわゆる「賀茂（鴨）族」と「出雲族（神）」の微妙な？関係が暗示されているのであるが、実はそこには、もう一つ、宗像族（←三女神）との関係も暗示されているのである?!これらを、いかに整合的に捉えることができるのかでもある？！

これについては、これもまたネット情報からで恐縮であるが、いわゆる「三貴子（天照大神・月読命・素戔鳴命）」の誕生前に生まれた水蛭子^{ひるこ}（蛭子命）が、かの有名な「恵比寿様」とされ、その後大国主命の子の「事代主命」も、その恵比寿様になったとされる？！

しかも、『日本書紀』は、大国主命を素戔鳴尊の子とするが、『古事記』では、彼を素戔鳴尊の六世孫とする。つまり、『日本書紀』では、水蛭子の恵比寿様は、大黒様（大国主命）の伯父（or 伯母）、『古事記』では、大国主命の六世代前の先祖（素戔鳴尊）の兄（or 姉）となる。

ただし、恵比寿様を信仰する者の多くは、そのような細かいことは気にせず、水蛭子（蛭子命）の恵比寿様を大黒様の子としているという?!そうなると、恵比寿様（水蛭子）は、大国主命（大黒様）の子の事代主神ということにもなる？！

ちなみに、『先代旧事本紀』では（も？）、事代主神は、大国主命と高津姫神（三女神の長女・タギツヒメ?!）の子とされているが、これについては、「海部氏勘注系図」で、高津姫神は「神屋多底姫」^{かむやたてひめ}の別名とされており、『古事記』の、大国主命が、神屋楯比売命を娶って生んだとする記述と一致するともいう。

何とも怪しげな関係（「事代主神」と「味鋤高彦根命」は同一人物?!）ではあるが、それはそれとして、重要なこと？は、その事代主神が、三嶋溝櫛耳^{みしまのみぞくひみみ}の娘の玉櫛媛^{たまくしひめ}との間に媛蹈躰五十鈴媛命^{ひめたたらいすずひめのみこと}（神武天皇の正妻！）をもうけ（『日本書紀』）、彼が、神武の岳父とされていることである？！

しかも、第2代綏靖天皇の皇后は、『日本書紀』では事代主の女^{むすめ}、『古

事記』では師木県主しきのあがたぬしの祖・河俣毘賣かわまたびめとなっていることから、事代主は、大和在地豪族で、磯城縣主しきのあがたぬし（『日本書紀』）を任じられた弟磯城おとしきとの関連性もあるとされる?!

だが、一方で、「国譲り」の際、出雲の美保関で青柴垣あおふしがきに沈んだとされる事代主神は、伊豆の三宅島で三嶋明神になったとする伝承もある。富士山の神とともに10の島を生み、現在の三嶋大社（静岡県三島市）に鎮座したとされる?!

また、『古事記』にのみ登場する大山津見おおやまつみ神は、伊予三島（大三島）の大山祇神社の祭神であるが、木花之佐久夜このはなのさくや毘売や石長いわなが比売、神大市かむおおいち比売、手名椎てなづち・足名椎あしなづち（素戔嗚命の正妻・櫛稲田姫の両親）等、多くの神をもうけている!

木花知流このはなのちる比売もその一柱とされていて、その彼女は、『出雲風土記』にみえる、素戔嗚尊の子・八島士奴美やしましぬみ神の妃になったともいう?!

(3)「出雲」と「葛城」、そして、そこでの「賀茂（鴨）」と「三輪（纏向）」の関係が、すべてを明らかにする?!

とにもかくにも、何とも複雑で、頭の中が最高に?混乱させられるが、以上、様々な情報（言い伝え）がある中で、改めて確認（整理?）すると、出雲に降臨（進出?）した素戔嗚命の子（ないし6世孫?）の大国主命は（素戔嗚命の娘・須世理姫を正妻として）、自らが行った「国造り」の果てに、「高天原」勢力（吉備?）から、その「国譲り」を強要され、承諾し、不思議なことに?、子?の事代主神が応諾すれば（出雲を代表するということ?）、一族（「出雲族」）は、天津神（「高天原」勢力）に背かないだろうと言ったとされる?!

何故、（冥界→杵築/出雲大社に隠棲した）大国主命は、多くの子の中で、事代主神の意向を尊重したのか、ここが必要なポイントとなる?!

これはおそらく、「出雲の国譲り」に際して、当の出雲（族）の内部に、「高天原」に靡いた勢力と反抗した勢力がいたことを示すものであり、前者が「事代主（系）」と「味鋤高彦根命（系）」、後者が「タケミナカタ」、つまり越・信濃・関東?の「出雲系諸族」であったわけであるが、前者のうちの「事代主（系）」が、最終的には、大和（「高天原」勢力）に靡いた、そして協力したということ、暗に示しているのではないか?!

ただし、その事代主神は大国主命の子とされているが、元々は出雲ではなく、大和の神で、国譲り神話の中で、出雲の神とされたともされる?!

すなわち、事代主神は、元来葛城の「田の神」で、「一言主」の神格の一部を引き継ぎ、託宣の神格を持つようになった?!このため、大和葛城（王朝?）において、事代主神は重要な地位を占め、現在でも、宮中の「御巫みかんなぎ八神」の一つにもなっている!ちなみに、「事代主神」の「コトシロ」は、「言

知る」の意で、託宣を司る神であり、「言」とも「事」ともされているのは、古代においては、「言（言葉）」と「事（出来事）」は区別されていなかったためである?!

いずれにしても、出雲（大国主）と大和（大物主・事代主）は密接な関係があり、その出雲（神）が、大和（葛城）では、仲良く？「事代主系（宗像氏?）」と「味鋤高彦根系（賀茂氏）」に分かれているようにも見える?!

彼らは、大和纏向（祭政都市）を主導したとされる「吉備」あるいは「尾張（氏）」と組んで、出雲を代表し、そこに、倭^{やまと}氏（←海人族・珍彦 or 椎根津彦）とか三輪氏が絡んでくる?!これが、初期大和王権の実体であった?!

余談ではあるが？、三輪（→大三輪・大神^{おおみわ}）氏は、もともとは北部九州に居たとされている?!だから、「宇佐氏」（→「大神^{おおが}氏」）や「宗像氏（神社）」との関係も見逃せない!?

大和（葛城）に出雲（族）がいて、賀茂氏や葛城氏（こちらは特定の氏族ではない?!）がそれと関わり、ある時期まで「三輪（纏向）」に加わっていたことは間違いないが、当の「出雲」には、記紀とは異なる「出雲神話」を載せる『出雲国風土記』、「出雲国造神賀詞」もある?!

その意味でも、「記紀」は、ある立場・勢力からの説明（言い訳?）に過ぎないのかもしれない?!